私と台湾2

編著者　　春芽天海

はじめに

本書の編集作業をしていると、今年の漢字に「令」の字が決まったというニュースが流れてきました。 新元号「令」和に新たな時代の希望を感じた一年。「令」和が日本最古の歌集・万葉集からの出典で、海外にBeautiful Harmony＝美しい調和と説明されたことや、「令」の字が持つ意味・書き方にも注目が集まったからだとか。

令和と改元された今年の五月に『私と台湾』の本を関係者にお分けしたが昨日の如く思い出しました。そしてまた令和になって初めての正月にその続編が発刊できるようにと思い、今月に入ってから編集作業を始めていたのです。

本書は二部構成で、第一部には台湾に関わった人たちの思い出とか色々な思いが書き綴られています。なかには「まさか！」とか「なるほど！」とか思う新しい発見があるかと思います

第二部は台湾生活も早いものですでに三十年が過ぎ、ここ一年余りの台湾事情をＦＢなどに投稿したものや非公開のものとかまたネットから引用したものなどを、日記風につれづれなるままに記したものを紹介しています。

皆さんは「緑のトンネル」の名前を聞いたことがありますか？今から20年前のことです。当時数年間台湾に住んでいた友人が、日本に帰国すると言うので「台湾で一番印象に残っているところは？」と聞いた時に「開口一番に緑色隧道と中国語で答え、そこは南投県集集にあるよ。」と教えてくれました。それでこの目で確かめようと後日現地に行ってみると、道の両脇の４キロにわたる街路樹に緑の葉が覆い茂って、本当に緑のトンネルそのものだったのです。真夏でも直射日光を遮って、時たま風が吹くと心地よく、まるで天燃のクーラーの中にいるようでした。ここは日本時代に住民に楠の苗を植えさせ、このような緑のトンネルにしたのだそうです。3年前に行った台東でも緑色隧道がありました、同じように日本時代にできて、当初は15キロもあったそうで。今では約2キロだけになって残っていました。

このように意外と台湾には日本と関係するものが残されているのです。 それは戦前の日本統治時代が50年にも及んだ事もあるでしょうがどこかの国のように破壊することなく保存したり復元したりしているからです。

このような台湾は別名宝の島と言われているように色々な宝（ネタ）が隠されており、 まだまだ日本人にも台湾人にも知られていない面が沢山あります。その辺あたりを今後とも紹介し続けて行きたいと思っています。

本書（電子書籍）が日台双方の多くの人たちに読まれ、何らかのお役に立つことができたら幸甚です。

最後に寄稿してくれた皆さんまたご協力そしてお世話になった皆様方に紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

来たる2020年が輝かしい年で昨年以上に前進する年になることを、そして皆様方のご多幸とご健康と平安であることを心よりお祈り致します。

2019年師走

喜早天海

暴れん坊将軍(早川友久）

　ぼくの家では夕食時によく『暴れん坊将軍』の番組を見ています。えっ？と驚かれる人もいるかと思います。1978年（昭和53年）から2002年（平成14年）にかけてテレビ朝日系列で放映されたものが、ここ台湾でもケーブルテレビで中国語の字幕付きで一日に3回放送しているのです。台日会の日本語族の人たちにも以前聞いてみたら、意外とファンが多く結構皆さん見てるんだなあと思いました、

「そんな番組知らない。見たことにない」と言う人のために、簡単に紹介すると、八代将軍・八代将軍・徳川吉宗が、町火消“め組”に居候する貧乏旗本の三男坊・徳田新之助に姿を変え、市井しせい）へ出て江戸町民と交流しながら、世にはびこる悪を斬る勧善懲悪ものなのです。

過日李登輝総統の早川秘書がこの暴れん坊将軍のことについて下記のようにネットで公開しており、李総統も毎日ほぼかかさず夫婦で見ているのを知りビックリしました。

「李登輝が「暴れん坊将軍」を愛してやまない理

早川友久 （李登輝 元台湾総統 秘書）

2001)8/7/

李登輝が「私はね、毎日テレビで『暴れん坊将軍』を見ているんだ」と話すと、一同は笑いながらもビックリする。「暴れん坊将軍」といえば、日本人なら誰もが耳にしたことのある時代劇ドラマだが、まさか台湾の元総統が見ているなどと思いもよらないだろう。

　なぜ李登輝が「暴れん坊将軍」を引き合いに出すかと言えば、これが李登輝の考えるリーダー像に合致しているからだ。「暴れん坊将軍」は、将軍吉宗が浪人に扮して町へ出て悪者を懲らしめたり、汚職を暴くというストーリーが主だ。もちろんドラマであることは承知の上だが、李登輝が好きなのは、この吉宗の「心がけ」だという。

　つまり、将軍という指導者の立場にありながら、庶民の生活のなかへ飛び込み、庶民の暮らしがどうなっているか、

困っていることはないかと、実に細やかに社会を観察している。それこそが指導者のあるべき姿なんだ、と話す。

李登輝はもともと農業経済の分野で台湾を代表する学者だっただけに、若い頃から現場を見ることをモットーとしている。あるいは、李登輝が小さい頃に感じたという社会の不公平と、江戸の封建時代を重ねているのかもしれない。

毎年末になると、地主だった李登輝の家に小作人が鶏や米を抱えてやって来て「来年も畑を耕させてください」と頼みに来る。そうした光景を見た李登輝は、子供心に「なぜ同じ人間なのに不公平なのだろう」と世の中の不条理を感じ取っていたのだ。こうした経験がのちに、農業経済を研究して農民の生活を向上させたいと思うきっかけになったし、総統になっても国民の生活を第一に考えることの原点になった。

指導者というものは常に庶民のことを気にかけ、今の社会がどうなっているかを知らなければ国を引っ張っていけやしない、というのが李登輝の考えだ。その点からいくと将軍吉宗の行いは、李登輝が考える指導者としての理想像になるのだ。

時代劇は勧善懲悪がはっきりした物語だが、正義感の人一倍強い李登輝の好みにも合っているのだろう。聞いたことはないが、もしかしたら、幕府の重臣の汚職を暴き「成敗」していく吉宗の姿を、総統として国民党の特権政治を是正していった自分に重ねているのかもしれない。

明石台湾総督の墓と鳥居（渡辺崇之）

第七代台湾総督明石元二郎氏の墓と鳥居

台北市　　渡辺崇之

台北の中心にある林森、康楽公園の一角に、大小二つの鳥居が立っている。ガジュマルの木がそれらを守るかのように覆いかぶさっているのが印象的だ。大きい方は日本統治時代の第７代台湾総督・陸軍大将の明石元ニ郎氏、小さい方は同氏の秘書官であった鎌田正威氏の墓の鳥居である。

明石氏は司馬遼太郎の「坂の上の雲」でもおなじみのように、日露戦争開戦前にロシア駐在武官として、反ロシア帝政への機密工作や秘密資金援助などの諜報活動を行なったことで有名だ。
しかし、氏の功績はそれだけではない。朝鮮半島の擁護を目的として治安を完遂し、日韓併合を実現に寄与。
1918年に台湾総督として赴任してからは、台北から高雄までの電力送電を実現した日月潭水力発電の開発、台湾人と日本人が同等の教育が受けられるようにした台湾新教育令の発布、海岸線鉄道の開設や司法改革など在任１年4ヶ月の間に数多くの功績を残し、多くの台湾人に慕われた。

しかし、在任中、帰省中の福岡にて病没する。「もし自分の身の上に万一のことがあったら、必ず台湾に葬るよう」という遺言どおり日本人墓地である「三板橋墓地」に埋葬された。
それが現在の林森、康楽公園である。台湾人による多額の寄付もあり、「軍人で皇族を除いて明石氏のような墓を持ったものはない」といわれるほど立派な墓だったようだ。
歴代の総督の中で今も台湾に眠る総督は明石氏ただ1人である。

戦後、この墓地はたちまち大陸から逃れてきた国民党の下級兵士の居住地と化し、バラックが乱立して50年近く放置されたままだった。
民進党の陳水扁氏（後の総統）の市長時代、1997年に補償金を支払うことなどで、ようやくバラックや市場が撤去され公園として再整備された。
明石氏の遺骸もこの時茶毘にふされ、現在は三芝郷のキリスト教共同墓地に埋葬されている。その際、残った２つの大小鳥居は228公園の人目の付きにくい隅に移設され、長らく案内板も無いまま（一時期228記念公園の管理団体によって簡易案内板が設置されたがそれもすぐに撤去）、ひっそりと佇んでいた。

林森、康楽公園の裏には欣欣百貨店という老舗デパートがありその中に映画館が入っている。現在の筆者のオフィスか

らは程近い映画館の為、退勤後にたまにふらりと立ち寄ることがある。
2010年11月、映画を見終えた後、ふと視界に見覚えのある鳥居が目に飛び込んできた。十数年も228公園に移設されていた鳥居が元の場所に戻ってきているのである。それまでのこの地には「明石元二郎総督の旧墓碑」という中、英、日文でかかれた簡単な説明のあるプレートがあるだけだった。更に12月中旬に再び訪れて見ると立派な案内板が中・日文で記されていた。

中国国民党の総統で市長であるこの時代に誰がどのような意図でこの移設に尽力されたのだろうか。
詳細な説明文を見る限り専門家も関わっていることは容易に理解できる。
公園の向かいのホテルで毎月開催される「台湾歌壇」（日本語世代の方々が自分達でつくった短歌を論評しあう会）に集まる日本語世代のお年寄りに聞いてみても、皆移設の事実自体が初耳だったようだ。
そうこうしているうちに、12月2日には東京新聞から、1月3日には朝日新聞から移設の経緯についての報道がなされた。

それらの記事によると、発案者は40年近くこの地に住む地元の里長（町内会長）の王金富氏（62）。「（明石氏が）福岡で死んでも台湾に戻ってきたと知って、感動した。
この地は日本人の宿泊するホテルや免税店も多く日本人が観光ついでに見学しやすい。
多くの日本人に見てもらえるのではないか。」この王氏の提案を受け、台北市議の陳玉梅氏が市政府に働きかけ、実現したとのこと。
陳氏は中国国民党員ながら日本留学経験のある知日派で、「明石さんは台湾を愛した。その心を大事にしたい」と異論も噴出する中、移設実現に奔走されたようだ。

台湾人の市井の善意から始まり、途中で政治的な意図もいろいろ錯誤したのだろうが、結果的に鳥居が元の位置に戻され、今でもこうやって受け継がれて、大切に扱われているという事実に、一日本人として心から感謝したい。

新設された案内板には小さい方の鳥居は鎌田正威氏の墓の鳥居とある。
実は今回の移設の前まで、この鳥居は第3代総督・乃木希典氏の母親の墓の鳥居とされてきた。筆者自身もこの案内板を見るまでそう思い込んでいた。当時の三板橋墓地には３つの鳥居があり、明石氏、乃木氏の母親、そして鎌田氏の墓用のものとされていた。
この小さい鳥居の裏にはかすかに昭和10年（1935年）と刻銘があり、その年代と照らし合わせると乃木氏の母親とは年代が合わず、残る鎌田氏のものと推測されたようである。
ちなみに乃木氏の母親が亡くなられたのは1896年のことである。

つい先日、愛日家の「老台北」として広く知られ、先ほど紹介した「台湾歌壇」の会長でもある蔡焜燦氏から「明石氏についてもっと学ぶように」と明石氏に関する本を送って頂いた。
蔡氏は明石氏のご遺骨を現在の三芝郷の墓地に移設した際に尽力されたお1人である。読み終えてから、再び鳥居を眺めに行くと、その横で案内版に目を通しているお年寄りがいる。台湾人義勇兵としてインパール作戦に参加し、奇跡の生還を遂げた蕭錦文氏だった。
蕭氏も明石氏のご遺骨移設の際にご尽力されたお1人だ。
当時のご遺体を掘り起して荼毘にふした時のことを思い出されているようだった。
明石氏が筆者に新たなご縁を与えてくれているように感じられた。

今や台北市内で最も訪れやすい日本統治時代の遺跡となった大小２つの鳥居。台湾在住の方、または近々台湾訪問予定がおありの方は是非気軽に訪れてみてはいかがだろうか。（2014.06.19）

ルバルバおばさん（森本恵作）

ルバルバおばさん

愛知県　森本恵作

（元 高雄日本人学校教員）

屏東縣三地門郷の石板家屋に住む一人の老婦人が亡くなった。86歳であった。多くの人々がその石板屋を訪れては、澄み渡った空気を味わいながら、その老婦人の昔話に耳を傾けた。訪れる人はみな、その老婦人を「ルバルバおばさん」と親しみを込めて呼んだ。

ルバルバおばさんと高雄日本人学校の関係は創立当初から続いてきた。夫である陳俄安さんが高雄に住む日本人と関係が深かったこともあり、日本人学校の設立や校舎の移転に多大な協力をくださったのだ。

霧台郷出身のルバルバおばさんは元々原住民文化に精通していたし、更に自身の研究熱心な性分もあって、伝統的なトンボ玉の造り方を再現して見せたり、踊り団を形成して各地で踊らせたり、山から採れる “ゲット”と呼ぶ草の繊維を使った編み物を創作たりと、原住民の独特な文化の多様性を表現することに長けていた。だから、日本人学校の子どもたちにもトンボ玉の造り方を教えることもあったし、昔話もたくさん聞かせてあげた。日本人学校の子どもたちの台湾理解に大きく貢献されたことは言うまでもない。

　そのようなルバルバおばさんと日本人学校のつながりにあやかって、私も三地門を訪れることがしばしばあった。いつも妻と二人の娘も一緒に行った。ひょっとしたら私よりも妻や娘たちのほうがルバルバおばさんに会いたくて「今度の週末、三地門へ行く？」と合言葉のように言うほどだった。

　ルバルバおばさんの人柄を言い表すのに、私にはよい例えが思い浮かばない。ただ、すこぶる勘の鋭い人であった。おばさんと話をしていると、いつも心の内まで見抜かれているような気がして決して嘘がつけなかった。下手なお世辞や言い訳などは即座に一蹴される。「せっかく台湾に来たのだから、たくさん研究しなさい。日本に帰るときに、それが一番のお土産になるよ。」と愚鈍な私に厳しく言い聞かせた。私は仕事の忙しさにかまけてルバルバおばさんの言いつけをしっかりと守らなかった。なかなか“研究”と思しき素振りも見せぬ私にきっとやきもきしたにちがいない。私にとってルバルバおばさんは研究対象ではなく、すでに台湾における心の拠り所になっていたのだ。そこへ行けばいつも受け入れてくれる、時には厳しく言い聞かせてくれる、そう、まるで母のような存在になっていたのだと思う。

　そんなある日、ルバルバおばさんから電話がかかってきた。「私が死んだときに、親戚のみんなが見られるような写真のＤＶＤを作ってもらいたいのよ」と言う。霧台の親戚が亡くなった時にそれを見たのだが、自分もこんなふうに懐かしんでもらえたらという思いがある、だれかに作ってもらいたい、ということであった。私はこの要望を受け入れるのに少し躊躇した。なぜなら、あの勘の鋭いルバルバおばさんがそのようなお願いをしてくるというのは、何か不吉なことを暗示しているのではないかという直感がよぎったからだ。

私はそれから何度か三地門を訪れながら、ルバルバおばさんが丁寧に整理した写真が収められたアルバムを借りて持ち帰り、スキャナーでパソコンに取り込む作業を繰り返し行った。と言っても、大量にある写真を一枚一枚取り込んでい

く作業は大変な労力と気力を要した。

やはり、怠け癖のある私は仕事の忙しさを理由にして、その作業を中断することも多かった。そんなときにルバルバおばさんから電話がかかってくると「もう少しでできるから」などとルバルバおばさんにはバレバレの嘘をつくのであった。

「あわてなくてもええよ、今度、私が、これ、これ、と言って選んであげるから、三地門に泊まりに来なさい。まだ、おばさんは死なないから、大丈夫よ」そう言って、私を安心させようとしながらも、どこかあせっているような感じの言いぶり。私も実は、この作業を完了してしまうと不吉なことが起こってしまうのではないかという不安もあった。

　８月に入り、ルバルバおばさんが倒れ、入院したという知らせを聞いた。その直前に私はルバルバおばさんと直接電話で話していたので、まさかという思いでいっぱいだった。なんとか、ＤＶＤを完成させてルバルバおばさんに見せなくては、そんな気持ちと、完成させたらいけないのではないか、という気持ちが相対する中で、私は一先ず試作品を作ってルバルバおばさんの入院先へお見舞いさせていただき、おばさんに見てもらった。意識もはっきりしない中でルバルバおばさんはしっかり見てくれただろうか。それから２カ月余りの入院生活の後、ルバルバおばさんは息を引き取られた。

亡くなった知らせを受けてから２日後、私はようやく約束のＤＶＤを完成させた。

ＤＶＤの作成にあたっては、できる限り多くの人々と写っている写真を使用した。それはルバルバおばさんがきっと望んだことだろうと思う。ルバルバおばさんは相手がどこの誰であろうといつもあたたかく迎え入れてくれ、どんな人であろうと決して区別しなかった。

だから、みんな三地門を訪れ、ルバルバおばさんを愛し、心から慕ったのだ。ただ一つだけ、ルバルバおばさんが人を見極めるときに大切にしていたことは、信じられる人かどうか、それだけだったと思う。

信じてもらってＤＶＤの制作を託された私は、約束を果たせなかった。

故許昭榮(峰禎)さんのこと（ 鈴木誠真）

故許昭榮(峰禎)さんのこと

高雄市 鈴木誠眞

台湾に来て、多くの方にお会いしてこの国の近代史を垣間見させていただいてきましたが、 どなたとの思い出もこの国にかかわる史実に素通りできない物語を教えていただきました。

　臺中伍圓の會に寄稿された方々の貴重なお話や、まだまだ知らないことなどをこれからもおそわってゆきたいと思います。

　許昭栄さんにお会いしたのは 台湾高雄に赴任した時からほどないときでした。
彼のよくゆく日本料理屋で紹介されて 気さくに握手してくれたとき、お年の割にはカッコ良いキャップ、（戦艦のマークが帽子に刺繍してあり、帽子の鍔にはオリーブの葉模様のついた私好みの絵柄）何かすごくナウい感じの印象を受けました。
その後幾度もお会いしたときには顔を見ると気さくにそばに座らせていろいろな話を聞かせてくれました。

許さんはいつもその帽子をかぶっていました。それは彼が乗組んでいた日本海軍の『雪風』のシルエットが正面に縫付けてある（現在は台湾にある『丹陽』）士官用の帽子でした。
彼はいつもそれをかぶり文字通り肌身離さず、遠くから見るとすぐに誰だかわかりました。
彼が私に話してくれたことは「雪風はどの戦役でも一つも被弾しなかった」為にそのことは米国では非常に興味があり、終戦後 米国本土で徹底的に分解調査して、日本海軍の不沈伝説の秘密兵器を探したそうです。 しかし何も発見できずに台湾に引取りに来るように伝え、許さんは米国からみずからが操船して台湾に回航したといっていました。
そしてその後の話として、日本は回航した当人を江田島の学校に招待したそうです。

江田島では桟橋につくと船着場から学校の玄関まで赤いじゅうたんが敷かれていて 最高の栄誉礼を受けたといっていました。 玄関を入ると「雪風の操舵輪」が展示されていて、懐かしく感激して涙が出たと話してくれました。 許さんは日本海軍の志願兵として太平洋戦争にも従軍しており、乗り組んでいた「雪風」は彼の歴史でもあったそうです。

　許さんは海軍兵士として 大戦終結後の台湾の船舶にも乗船して様々な歴史を体験し、私に話してくれました。 そのなかには中国国民党の大陸反攻の兵員輸送と撤収するときの模様を涙ながらに悲しそうに話してくれたことがありました。 台湾人の農民兵を大陸の戦場では最前面で戦わせて、負けて台湾に戻るときには自分たちだけが船に乗って戻り、置き去りにされた台湾人の兵士はバラバラになりながら陸伝いに朝鮮半島まで落ちのびて、朝鮮動乱に使用されていた米国の上陸用舟艇で台湾に戻れたと いっていました。その中には台湾人だけではなく欧米人や日本人もいたそうです。 過ぎたことですが これが当時の実態です。

許さんはいろいろな話の中で一度だけ 日本に対して強烈な不満を吐露されたことがありました。 しかし、それがどういう事だったのか、様々な体験談を聞くことばかりが先に立ってしまい、 前号の各記事を読むまで思い出せませんでした。それはまさに台湾人が祖国というものの教育を日本統治時代から受けて、日本国民としての品格・素養を得ながら其の儘今に至っていることだったのです。

しかし、許さんは一度そういう事を云ったきりで、その後は何も言いませんでした。
後日、亡くなられた後 所要で台中に出かけて、農家の方々とお話をする機会がありました。 意気投合して歓談しているうちに、私が高雄に住んでいて、大先輩に許さんという方がいたが亡くなられたというと 聞いていた農民の方々の目つきが変わり、『あなたは峰禎、許峰禎を知っているのか！?』と聞かれ、彼の葬儀には家族扱いで、鳳山教会で告別式の最初にお別れをさせてもらいましたというと、 皆さんは非常に驚かれて、『彼は私達の戦友で同志だ』と言って、同じ兵役に参戦していたのだという話を聞くことになりました。 中には目を潤ませていた方がいたのが忘れられません。 許さんの お人柄からどれだけ多くの兵士仲間がいようとも驚くにはあたらないという事を身にしみて理解できました。 日本統治時代を経て台湾の歴史はどういうものであったのかを理解することは必然でありましょう。 日本では歴史教育は国民の必須教養科目ですが、台湾の若い諸君に聞いても憤然として『台湾自身の大戦終結以前の歴史は習っていない』と言われます。 学生の授業ノートも見せてくれましたが、近代の歴史部分は書かれていないという状態です。　私は過ぎた事であっても、すぎてしまっている事だからこそ、（私たち外国人が立ち入ることの無い政治問題としてではなく） 台湾は台湾自身の歴史を国民が知っているべきではないかと思います。

これからの国際社会において台湾の存在は非常に重要だからです。

【 許榮(峰禎)さんは2008年5月20日馬英九第二期総統選挙日を控えた日 臺灣退役軍人遺族協會(前全国原国軍臺灣籍老兵遺族協會)が「臺灣退役軍人を祀るための公園」として申請していた旗津で愛車に乗ったまま焼身自殺をしました。肌身離さず被っていた帽子は日本人友人の元に預けていて、事情を知った人達は、わざと残していったと地団駄を踏んで悲嘆にくれました。 】

「台湾のスタンスがよくわからない、なにかが矛盾して分解しているようだ」という話が所属しているFFIという国際的なクラブや 西欧の友人から聞こえてきます。

（それはなぜでしょうか？ 歴史を紐解くことで答えは見つかると思います） 将来はこうなればいいのに？と 願うことができる様にまでなるのには あとどれほどの時間が必要なのか日本人として非常に関心のあるところであります。

ときには目を細めて好好爺このうえない『許さんの笑顔』がもういちど見れる日を夢見たいと思います。

-

前号の『私と台湾』誌の中に拝見しました先輩諸氏のお話にもありました『日本国民』として忠誠を尽くしてきた『台湾の日本人に対して』そのご辛苦に日本としてねぎらい報いることは真の終戦につながることではないか 元統治國として果たすべきものが一つ少なく「ならねばならない」のではと思います。

日本が好かれていると喜んでばかりいるよりも 元国民の方々に恥ずかしくない国でありたいと願います。

（2019年 令和元年8月）

じゅもんが ちがいます

兵庫県　杉中　学

私が中国語を習得するため、台北の臺灣師範大學國語教學中心に行ったのは、1983年のことでした。当時の台湾は蒋経國総統の施政下、まだ戒厳令が敷かれており、色々な制限もあった時代でした。町の人々は、一見すると日本と変わらないような平和な暮らしをしているように見えましたが、高速道路の料金所や大きな橋のたもとには、銃を持った兵士が立ち、街の中を憲兵隊が巡邏している姿も毎日のように見かけるなど、台湾と中国とが対峙していることを実感していました。

私は師大での語学留学の後、日本企業の駐在員として引き続き台湾に住み続け、在住期間は７年に及びました。その頃の私は20代後半から30代前半で、同年代の日本の友人たちは学校を卒業して会社勤めをし、一方まだ結婚には早いという年代、言い換えれば自分の給料は好き勝手に使えるという、つまり「独身貴族」の時期。友人たちは次々と私を訪ねて台湾へ遊びにやって来ました。

その中の一人である高校時代からの親友が、発売されて間もなかった「ファミコン」を土産に携えてやって来ました。今から思うと単純なゲームばかりだったのですが、それでも当時の貧乏留学生の間で、ファミコンがあっという間に流行しました。しばらくすると「ドラゴンクエスト」が登場し、面白いゲームだとの日本での噂が台湾にも伝わりました。

その時代の台湾では著作権を始め、知的財産権はほとんどないに等しく、街中には書籍・CD等の海賊版が氾濫し、日本でのファミコンブームに乗って、台湾でも安価なファミコンのゲーム機やゲームソフトの海賊版が、あっという間にあちこちで見られるようになりました。

街中に現れたゲームソフト屋で、話題の「ドラクエ」も日本で買うよりもずっと安い値段で売り出され、日本の貧乏留学生はこれに飛びつき、時間があればゲームに興じました。しかし、「海賊版」の悲しさ、ゲームソフト自体は安く買えるものの、さすがに説明書までは付いていないため、ゲームが進むに連れて手に入れるアイテムや魔法などの内容や使い方がわかりません。体力を大きく回復する呪文をすでに身につけていながら、その使い方を知らず、大量の「薬草（体力を少しだけ回復できる）」を持ったまま、地下ダンジョンで「のたれ死に」を繰り返す友人もいました。

そんな時はゲーム仲間同士で情報交換をしながら、ゲームを進行させるのですが、今のようにスマホや携帯どころか、PCもない時代、自分の頭に「？」を秘めたまま、ゲーム仲間に会う機会を待つか、どうしても待ちきれない場合には固定電話で連絡を取ってヒントを得る、といった様子でした。

ファミコンゲームは、当然のように瞬く間に台湾の子供たちの間にも浸透しました。ゲームソフト屋の店内には、ファミコンがつながれたテレビが何台も置かれて「にわかゲームセンター」と化し、近所の小学生が群がっていました。画面の上方から現れて襲ってくる敵を次々に打ち落としていくシューティ

ングゲームに熱中する子、「スーパーマリオ」に興じる子もいましたが、なんと「ドラクエ」の画面をのぞき込み、魔物たちと戦いを繰り返している子供も少なからず見かけました。「ドラクエ」を始めとするRPG（ロールプレイングゲーム）は、画面に現れるシナリオ展開に沿って、「話す」「調べる」「闘う」「逃げる」等のコマンドを指定しながら進めていくゲームで、表示の言語（「ドラクエ」の場合は日本語）が理解できなければ、ゲームは進めようがないはずなのです。

しかし台湾の若きゲーマーたちは、そんなことはお構いなしに、私たち日本人と同じくらいのスピードで、どんどんとゲームを進めていました。

しかし彼らには一つの大きな関門がありました。RPGは、ゲームを全てクリアするには長い時間を要し、１日ではとてもゲームを終えることができないので、ゲームの進んだところまでを記憶しておかなければなりません。現在のゲームソフトには、ゲームの進度を記憶できるのに十分な記憶容量があり、ボタンを１回押すだけで、ゲームのデータが簡単に保存できます。しかし、その頃のゲームソフトは記憶容量がごく限られていたので、これまで進めてきたゲームを次回も引き続いて行うためには、ゲーム中断時、画面に現れる「復活の呪文」と称するパスワードを書き写しておき、次にゲームを再開する際に、この「復活の呪文」を入力しなければなりませんでした。

-

「ドラクエ」の場合、「復活の呪文」はすべてひらがなで、しかも初期のゲームは画面の解像度が悪く、「あ」と「お」、また「ぬ」と「ね」と「め」などの文字の判別が難しく、私たち日本人でも、時々呪文を書き写し損ね、メモしておいた呪文を入力してゲームを再開しようとしたところ、「じゅもんがちがいます」という画面が現れ、それまで長い時間掛けて進めてきたゲームのデータが回復できず、費やした時間が全て水の泡になってしまうことがありました。

ゲーム屋の子供たちは、なんとこの呪文を一生懸命ノートに書き写していました。日本の子供は一人としておらず、またこれらの台湾の子供たちが日本語を学んでいるということはあり得ません。つまり、彼らにとっては、テレビ画面に現れた、その読み方すら分からない謎の記号を書き写し、そして次にゲームを再開する時には、この記号を一つ一つ画面から探して入力する、という作業を行っていたのです。

彼らもまた、パスワードを書き写し間違え、現れた「じゅもんがちがいます」の画面を見て、「なん

でゲームの続きが出来ないの？　一体、なんて書いてあるんだろう？」と首をかしげていたことでしょう。

その後、台湾のゲーム少年たちが日本語を学び、呪文の文字が読めるようになったのか、また自分のやっているゲームのストーリーを理解することが出来るようになったのか、30年以上を経た今となっては知るよしもありません。

彼らがこのような形で初めて日本語と接触していた戒厳令下の時代、日本語の歌やテレビ番組が公共の電波に乗ることはなく、また日本語を専門的に教える日本語学科も、わずか4つの私立大学に設けられているのみでした。

日本に帰った今、語学留学やワーキングホリデーで日本に滞在している台湾の若者たちに聞くと、「日本のゲーム・アニメ・J－ポップ・ドラマが好きで、日本や日本語に興味を持ちました」という答えが少なくありません。彼らにとっては台湾にいても、日本の映画やテレビ番組を日本とほとんど時差なく見ることができ、また日本語の専門教育をする学校も増え、あるいは独学で日本語を学ぶ場合でも、インターネットで実に手軽に機会を得ることができるなど、私が住んでいた時代とは、まさに隔世の感があります。

そんな時、「じゅもんがちがいます」の画面を見て呆然としていたであろう、あのゲーム少年たちは、今どうしているだろうか、と思い出します。きっと何人かは日本語の達人になっているのでは、と勝手に想像しています。

（＊写真はインターネットからの転載です）

台湾に感謝する活動をしてみて(伊勢寛）

台湾へ感謝する活動をしてみて

仙台市　伊勢寛

【活動に至るまで】

2011年3月11日に発生した東日本大震災（地震と津波）と原発事故により、岩手・宮城・福島の3県は壊滅的な被害を受け、多くの尊い命が失われました。当時私は、青年海外協力隊の仕事でラオスにいて、震災の実体験はありませんが、台湾による多額の支援のニュースはラオスにも伝わってきて、いつか台湾に恩返しがしたいと思うようになりました。

日本に帰って教師になりましたが、台湾へ行くために退職。アルバイトをしてお金が貯まったら台湾へ語学留学（台南・屏東・苗栗）するという生活を3年続けました。台湾へ感謝する活動はその間行われたものです。

【日本での活動】語学留学の傍ら、台湾のために何かしたいと思い『仙台台湾朋友会』という会を立ち上げました。在仙の台湾人留学生と交流会をしたり、台湾に関するセミナーを開催したりしていたのですが、会長をしていると時には幸運な話が舞い込んでくるもの。台湾のテレビ局が復興の様子を取材に来るので、カメラの前で何かしゃべってほしいと頼まれました。ここぞとばかり、台南で覚えた台湾語で感謝の気持ちを伝えました。取材に来ていたのは中天電視で、どのように放送されたのかは知りませんが、台湾語で何か言っている私をテレビで見たと、後日台湾の友人が教えてくれました。

取材を受け、自分でも何か企画して感謝の気持ちを発信したいと思うようになりました。ちょうどその頃、台湾が好きで交流活動をしているという人から連絡がありました。「台湾人が多い観光地に出向いて、台湾プロ野球のユニフォームを着てメッセージを書いたプラカードを持って立ち、興味を持って話しかけてくる台湾人観光客と交流するというスタイルで活動をしている。仙台でもやってみてはどうか？」とアドバイスをもらいました。

さっそく青年海外協力隊のOBで構成される宮城青年海外協力協会の協力を得て、台湾へ感謝を伝える活動を企画。仙台で開催された国連防災世界会議のイベントで実施しました。初めこそユニフォームを着てプラカードを持って公衆の面前で立つのに恥ずかしさを感じたものの、話しかけてくる台湾人が意外にたくさんいて、慣れると喜びに変わりました。

これと並行して、道行く人に呼び掛けて、台湾に向けて「ありがとう」を言ってもらい、動画を撮影してYouTubeで配信することができました。間接的ではありますが、被災地から感謝の声を台湾に届けることができたと思います。その時作った動画は下記のURLからご覧いただけます。

ARIGATO TAIWAN ⇒https://www.youtube.com/watch?v=s-RR5zxBdNE

【台湾での活動】

語学留学を繰り返していた時期で、大学がある町を拠点に授業がない時活動できるので、台湾へ活動を広げました。活動は駅・野球場・観光スポットなどで行い、特に屏東と苗栗ではじっくり活動に取り組むことができました。

多くの台湾人が足をとめてくれて、交流が広がりました。

とはいえ、困ったこともありました。物乞いか何かだと思われていたことです。「義捐金が足りないの？」と言われたり、「これで何か買って食べなさい」とお金を渡されたり、毎回私に弁当を買って持ってくる人までいました。台湾人の友人に相談したところ、「そんな目立つことしてたらお金に困っていると思われてもおかしくないよ」という意見もあれば、「台湾人は相手がお腹減っているかをまず心配するんだから、遠慮なくもらったらいい」という意見もありました。私が断ると大抵の人は残念な顔をするので、面子を立てるためにも厚意はありがたく頂戴することにしましたが、物をもらうために活動をしていると思われるのだけは嫌でした。本当に多くの人から様々なプレゼントを頂戴し、ありがたかったのですが、私としては日本人が台湾に感謝していることが道行く人に伝われば、それでよかったのです。

活動をしていて特に嬉しかったのは、手紙を書いて渡してくれる人がいたことです。「日本に感謝している」と。こちらはどんなに感謝しても足りないくらいなのに、逆に感謝されてしまう感謝の連鎖が起こり、これから日台関係がますますよい方に向かっていくことを感じました。私の活動がネット上で紹介され、SNSで拡散されたので、多くの人に感謝の気持ちが伝わったのではないかと思います。

【活動をしてみて感じたこと】

活動をしてみて、多くの台湾人は日本に多額の支援をしたことについて、特に大したことをしたとは思っていないということに気付きました。大変なことでも当たり前のようにするところが格好いいと感じました。確かに「相手が日本だったからこそあれだけの支援ができた」という声はあり、それも事実でしょう。一方で、救済に熱心な台湾の国民性を考えれば、どの国で災害が起こっても多額の支援をすると思われます。例えば、中国の四川地震の時も多額のお金が渡っています。ですが、「中国人は感謝をしたか？」という声も当時よく耳にしました。台湾からの支援を当たり前と終わらせるのではなく、感謝し友好につなげるのが日本人なんだと思います。

震災から6年経ったところで、一区切りと感じ活動は止めましたが、台湾へ感謝を伝えることと、日台友好の種をまくことはできました。会も解散し活動はもうしていませんが、台湾の皆さんには日本人が今でも感謝していることを伝えたいです。台湾で御縁に恵まれ、これらの活動をした経験が今でも自分の人生の糧になっていることに感謝しています。

謝謝、多謝、按仔細、ありがとう台湾！

台湾の思い出（中山孔明）

台湾の思い出

大津市 中山 孔明

私と台湾とのお付き合いは戒厳令下の1980年代初めから始まりました。私の台湾訪問は恐らく100回を超えており何度訪問したかは正確には解りません。

台北が訪問回数でいえば一番多いのですが、長く滞在した都市といえば新竹という事になります。

私は2014年台北の士林に住む日本人（ロングステイ倶楽部の海外会員）からロングステイ倶楽部という団体を紹介されました。その倶楽部の年４回の定期会合で“海外でも健康に暮らすために”と云う演題で喋って欲しいというのが目的であった様です。

その団体の会員の方々が、新竹（東星駿業）・台中（振英会館）・高雄などでロングステイを楽しんでおられる事も後に知る事となります。

この団体とは結構縁が深く、上記の講演をきっかけに、全国大会や関東支部での講演を頼まれたり、関西支部では月１回程度開かれる医療と健康の同好会の外部講師をしていました。

２０１５年３月たまたまロングステイ倶楽部の会員の方から我々もその期間滞在していますので、新竹に滞在されては如何でしょうかという提案を受けました。

これが縁で新竹にはその後１３回訪問し、１回の滞在が１か月ですので、１年強新竹には住んだ計算になります。（新竹是我第２的故郷）何故こうなったのかを考えますと、私はリタイヤ後の計画の一つに医療者と患者の間の壁を少しでも低くし、相互理解を深めたいと云う希望があり活動していたからです。

宿泊先の施設のオーナーは新竹市銀髪族協会の創會理事長で後に台灣銀髪族協會全國聯合會理事長に就任された林幼美さんで、彼女の紹介で私は色々な場所で健康関連の講演をしました。

私は日本でも同様の活動をしていますが、１年の内９か月滞在する日本での講演活動を３か月しか滞在しない台湾での講演活動が上回る様になりました。

台湾での講演会数は年間45回ぐらいで1日２回などもしばしばあり、過去に問題があった施設をお断りしたり日程が合わないものも、結構ありますので講演に追われていると云うのが現実です。（台湾の方は直前に依頼される事が多く講演日の３日前と云う新竹光華里の講演が記録で、多分

これを上回る事は今後もないでしょう？何度も断られ早く申し込まないと、という事を学習された方々も結構いますが、計画性は台湾人が日本人に学ぶ点かもしれません？）

日本では組織を通じての活動でなければ余程の有名人でなければ成り立ちにくく、台湾は良いものを提供すれば口コミでどんどん拡がっていくという事を強く感じています。

どこで・誰から私の事を知りましたかという質問に返ってきた答えは友達（全く知らない人）の友達（知っている人）であり成程という事が後に解った事もしばしばで、台湾人の人間関係の強さ・豊かさを何度も経験させられています。（日本はこの面が昔と違いかなり弱くなって来ており、台湾人に学ぶ点と思います）

私は１日のスタートを早朝のウオーキングですが、10年歩いている地元で声が掛かる事はそれ程多くありませんが、18尖山などを歩いていると必ず何人かの台湾人からから声が掛かります。

そういった意味で新竹は第２の故郷と云うよりも故郷その物なのかも知れません。

喜歡的台湾

大阪府　阪口健一

　僕が生まれ育った神戸は外国人の多い町だ。進学した高校の三年生のクラスでは台湾生まれの蔡勝義君が級長だった。後に日本大学の教授となったことからも、成績優秀であったことが分かる。

　1961年に大学を卒業し、和歌山の製鉄会社に電気技術者として入社した僕は、その後、1980年に茨城県鹿島の製鉄所に転勤となった。

　1960年に建設が始まっていた鹿島コンビナートの一角に位置する会社でも製鉄会社の電気設備が増設となり、海外からの安価な設備導入も検討した時期であった。

　そのような環境下で1987年に韓国と台湾の電気設備製造業の技術レベルを調査に行く計画を立てた。これが僕にとっての初めての台湾訪問となった。

　最初に訪れた韓国は、釜山空港に迎えてくれた商社の金社長のアテンドで一週間かけて多くの電気設備製造業の工場を視察した。

　総じて言えるのは製品のレベルがまだ低いのに、応接してくれた人は態度だけは横柄で、その後も長続きする関係には発展しなかった。

　一週間後、香港で一泊し、台湾の高雄に飛んだ。
高雄という台湾南部の街は、昔は「打狗(ターコウ)」と呼んでいたが日本国が統治した頃に「犬を叩く」という意味を嫌い、発音の似た「高雄(たかお)」と書くようになったらしい。これが現在では「高雄(カオシォン)」と呼ばれ、台湾随一の工業都市である。

　僕たちは台湾唯一の一貫製鉄所「中国鋼鐵股份有限公司」を訪問し、動力部門の人たちと技術交流をした。
終了後、世話をしてくれた技術顧問の林(リン)さんからホテルまでタクシー(的士)を使うのも良いがバス(公共汽車)に乗ってみてはどうかと提案があり、バスに初めて乗ってみた。車内は広告だらけで、なぜか老人用おむつの広告が記憶に残っている。街には工業都市の象徴のように道路の真ん中に高い高圧送電鉄塔が建てられており景観を損ねていた。また、広告看板がやたらと多いのが目に付いた。
滞在中は大阪の商社の台湾駐在員のＫさんがアテンドしてくれた。初めての夕飯は台湾料理となった。中でも「生の蜆のにんにく醤油漬け」が珍しく、紹興酒によく合った。食後、市内のカラオケバーに連れて行ってくれて、いざ歌おうとテレビ画面を見たら日本語の歌詞が映っている。唄を歌い出すのに合わせてその歌詞が横にずれていく。よく見ると歌詞が書かれた本を手で持って横に移動しているのが画面に映っている。楽屋裏に居る人が歌詞カードをビデオカメラで写しているらしい。これには僕達も参っ

た！参った！だった。

　翌朝の食事はバイキング形式で豆乳が大きなボウルに用意されており、初めて飲んだが案外うまかった。お粥に塩ピータンを入れて食べたのも初体験。デザートには楊貴妃が好んだという果物「レイシ」も初めて食べた。まだ日本では冷凍物が見られるようになったばかり。
　その後、高雄から飛行機で台北に移動して数社の電気設備製造会社を訪問した。

４日ほどの台湾だったが、一週間滞在した韓国よりも台湾の想い出のほうが多かったのは、台湾の人たちが誰も穏やかな性格だからと思った。それに比べて、韓国の会社で会った人達は殆どがものすごく先鋭的に感じたからかも知れない。

　その後、台北で紹介された電気制御盤製作の会社では、日本国内で新設する電気設備を製造して貰う事になった。僕の勤める会社では若い電気技術者を担当させて、台湾へ出張させた。
また、台北に拠点を置く機械設備製作会社の林社長とも取引ができ、
一度は淡水河辺の自宅に招待されてことがあった。また、台北市はずれに有る電気設備製造会社も社長とは親しくして頂き、付き合いが続いたし、訪台の度に連絡すると、ベンツで迎えに来てくれた。

　1990年頃には生産設備製作のコストダウンを考えて台湾や韓国で製作することが多くなり、僕の所属するエンジニアリング部門でも同様に台湾での設備製作を検討することとなった。
　鹿島に鋼管製造設備を新設するに当たっては、一部の設備製作を担った川崎重工業（株）の台湾窓口の会社の社長とも縁ができた。その社長が台中市の会社の蔡さんだった。台北や新竹にも同様の会社との取引が増えてきた。

　このように、これまで知り合いとなって、現在も付き合いが続いている外国人にはタイ国人や中国人も居るが台湾の人が一番多い。国民性が一番合うからかも知れない。

　その後も、何度も台湾の各地を訪れた。北は野柳海岸、台北では陽明山から市内の夜景を眺め、南は鵝鑾鼻で遠足に来ている小学校生に混じり、南の海を眺めたものである。元米国大統領に似た「ニクソン岩」も見に行った。

　最初の訪台時に案内してくれた大阪の商社の台湾駐在員Kさんとは今でも、友人として付き合いが続いている。
毎年、アジア映画祭という催しが大阪で開催されていると、Kさんは必ずその催しにエントリーしている台湾の映画を調べて、一緒に見に行くことが多い。また、よく大阪市内の台湾料理店で食事をすることもある。

　また、大阪府の関係会社で省エネルギー診断を事業として担当している人が台湾大好き人間であることが分かり、台中から大阪に出てきて市内で居酒屋をしている人を見つけ、時々出かける。女性の店主は台中駅前のホテル経営者の身内との事だ。
　このように、台湾をキーワードにした人脈が増えてきている。

何回かの訪台で、基隆から宜蘭への旅は想い出に残っている。

1945年の台湾を描いた映画「非常城市」の舞台になった九份の金鉱山跡(黄金博物園区)、昭和天皇が以前に泊まられた家や日本人従業員が住んでいた家屋など見学したが、桜がちょうど満開だった。
更に南下し、宜蘭の温泉に夕刻到着、街のコミュニティー広場にある足湯に浸かりながら、演歌を演奏する若者やマッサージをして貰っている老人、果物売りのおばさんなどを見ていると、男の人が熱い湯を足湯に足してくれている。のんびりした時間を過ごした後、海鮮料理の夕食となった。

翌日、更に南下し、羅東の国立伝統芸術センターを見学すべく車を停めたら、向こうからニコニコして僕に手を振っている人がいる。よく見ると、昨日、宜蘭の足湯で足し湯をしてくれていた人だ。この人はこの博物館のボランティア案内人だったのだ。
この旅も、台湾の人たちの穏やかな性格に触れた楽しいものであった。

台湾と私（前田優子）

台湾と私

大分県　前田優子

私が台湾で暮らしたのは、転勤で台中に赴任した平成18年4月から足掛け9年間でした。平成9年4月に初めて出張で台湾に降り立った瞬間『この国好きだわ』と感じたのですが、まさにこの直感が当たっており、台湾での生活は（本当に）一日たりとも飽きることなく、目新しく、それでいて懐かしさを感じる風景、日々の生活ぶりや交流は興味深く楽しく、予想外の人事異動というきっかけにより、人生に台湾との御縁が持てた自分の幸運に感謝しています。

　ずっとこのまま台湾で暮らすつもり100％でしたが退職を機に日本に戻り、はや5年目を迎えた今、身の回りには「台湾に興味あります」「次旅行に行くなら台湾」「台湾っていいらしいですよね」という声が多く、そんな言葉に触れるやいなや熱く台湾を語り出し、相手の目が輝いているのを見て、ますますヒートアップして止まらなくなる…という時間が今の私にとっては楽しく、話すたびに懐かしく愛おしい友人や出会った人々の顔、その時の出来事などが次々と浮かんできます。

　それでも日本に戻った頃は台湾に対するイメージを聞くと、食べ物が安くておいしいらしいという声がほとんどでした。それが最近は「親日的」「311で巨額の寄付をしてくれた国」という声を耳にすることが多くなりました。ネットの普及に日台お互いの国を訪れる人が増えているこの時代、台湾に対する日本人の関心と理解はこれからも高まっていくと思い、そんな今後の展開が楽しみでもあります。

　台湾の一番の魅力を私は「人情味」だと思っています。

仕事に向かうエレベーターの中やバスの中で、見知らぬ人からよく声を掛けられました。まだ台湾に来て日が浅いころ、道に迷ってしまい困って駅への道を尋ねようと店に入り、店員さんが見当たらなかったため、たまたまいた女性のお客さんに意を決して声を掛けました。すると駅へは徒歩ではたいへんだからと言って、買い物をさっと切り上げバイクで送ってくれました。道中にその方の家があったので夕食の支度もあるでしょうからここでいいですと降りようとしましたが、暗くなりかけているので心配だからと、いったん自宅へ戻り私にヘルメットを持ってきてくれました。わずか数十分の短い時間でしたが、お互いの家族や生活についてバイクの音にかき消されないよう大きな声で話したこの女性のことはずっと心に残っています。着いて改めてお礼を言おうとする私にバイバイと手を振りUターンするとあっさり帰っていく後ろ姿を見送りながら、こんなことでお礼なんて要らない＝日常の普通のこと、というこの女性の想いが伝わってきて胸が温かくなりました。

最初から好きだった台湾と台湾人ですが、もっともっと触れ合いたいと思い始め、日々退勤後や休みの日など毎日のように外に出てはいろんな店に入り、店の人と話も弾み「またあの店に行ってみよう」という感じで楽しい交流が始まりました。こんな風にコーヒーショップや屋台などお店の方と親しくなり足しげく通ったり、相席になった見知らぬ人と話をしたり…ということをしていくうちに、もともと初対面の人と話すことが好きな性質が台湾で花開いたようで、日本にいた頃には考えられないほどの変化

でした。「水が合う」と言いますが、台湾の雰囲氣と氣質が私にピッタリ合っているのを感じます。第二の故郷と言える台湾の風土や人々の氣さくで熱く温かい人柄が、私にたくさんのステキな体験をさせてくれたと思っています。そんななか年に数回日本に帰国したとき職場の同僚たちに台湾での体験をあれこれ話すとすごく興味を持ち、まったく知らなかった台湾に対する親近感が湧き好感度が上がった、もっともっと聴きたいと言われても話題は尽きることなく口をつき、たのしげに耳を傾けている同僚友人たちを眺めるとき、日本人と台湾人は魂と言ってよい、お互いが深い部分で自然と共感できる、深い縁と堅い絆で結ばれているのを感じる瞬間がたびたびありました。

そんな私の夢は、将来日本と台湾両方に居を構え行ったり来たりする生活をすることです。

台湾では南部の海が毎日眺められる場所がいいなあ～とずっと考えています。

台湾銀髪族協会とロングステイクラブ（神原克収）

台湾銀髪族協会とロングステイクラブ

兵庫県　神原克收

　私の海外ロングステイの日本での拠点はロングステイクラブ（以下ＬＳＣ）である。台湾には毎年1ヶ月間のステイを２～4回実施して10年になる。毎回ＬＳＣメンバー10～30人と一緒にロングステイを楽しんでいる。ステイ先は以前は台中の振英会館であったが、振英会館の方針が「滞在1ヶ月以上」に変更されて以降足が遠のき、現在は新竹と高雄に代わっている。足が遠のいた理由は同行するメンバーの中にはどうしても1ヶ月間時間が取れないメンバーがいるためである。

台湾が好きになった要因

　私が台湾を好きになった最大の要因は「人が親切」ということである。ご存じの通り台湾は親日の人が多く日本のことを実によく知っている。一方日本人は台湾のことを殆ど知らず、中には「中国の一部」とか「中国と同じ漢民族」という程度の理解の人も多い。

　こうした誤解を解くには一人でも多くの日本人に台湾の本当の姿を見てもらうことが一番と思い、毎年延べ40～60人を引率して台湾に来ている。10年間で延べ500人ほどの日本人に台湾ロングステイを体験してもらった。

　我々日本からのロングステイヤーを受け入れて下さる主体は台湾銀髪族協会の皆さんで、１ヶ月間滞在中何回か銀髪族協会メンバーとの交流会を実施している。

銀髪族協会との出会い

　台湾銀髪族協会は全国の主要都市に支部があり会員は3,500名くらいで最大の支部は新竹である。銀髪族協会との交流は2012年に遡る。交流のキッカケとなったのは2012年秋に実施したＬＳＣの大阪でのイベントである。そのイベントに台湾銀髪族協会から「参加したい」という連絡が入った。受け入れるには　*言葉が判らない　*受け入れ準備が何も出来ていない等々の理由でお断りしようという雰囲気であった。しかし、折角国際交流出来る機会なので、「受け入れ作業は全て神原が引き受ける」という条件で受け入れることになった。

　台湾からは銀髪族協会の全国連合会理事長をはじめとして新竹・高雄など主要支部の理事長、幹事長など16名が3泊4日で日本のＬＳＣ行事に参加された。最初はチグハグでぎこちない交流であったが時間

とともに意思の疎通が出来るようになり、相互交流ムードが盛り上がった。その際皆さんが熱心に日本から台湾へのロングステイに誘っていただいた。中でも新竹と高雄、屏東の銀髪族協会が最も熱心に誘ってくれた。

早速年明けの2013年2月に16日間かけて下見に行き、台湾各地の銀髪族協会の受け入れ状況を確認して回った。その結果新竹と高雄の受け入れ体制が整っていることが判明。しかし高雄は肝心なコンドミニアムがなく、ホテルでのステイを提案されたが条件面で折り合いがつかず、後日コンド探しをすることになった。

新竹でのステイ

2013年11月待望の新竹銀髪族協会との交流ステイを実施した。初めてということも手伝って大変な歓迎ぶりで連日交流行事が続き大いに盛り上がった。ＬＳＣサイドの参加希望者も多く翌2014年は3回に分けて実施するほどの盛り上がりをみせ、一気に新竹でのロングステイが定着した。しかしいくら好評だったとは言え、3カ月連続で実施したことは後に禍根を残すこととなり失敗であった。それは受け入れ側の「おもてなし疲れ」を起こしたことである。（を記入しそれ以来毎年1回に絞って1ヶ月間の新竹ステイを継続し今日に至っているが、「おもてなし疲れ」の弊害が出て年々台湾側の交流メンバーが減少し、最近では10名程度で固定化傾向になっている。日本側の参加者も同様に減少傾向で最近では10名程度とこちらも固定化傾向が強くなっている。ただ日本側の減少はコンドのキャパコンドのキャパシティ減少が主たる要因で、

今でも募集すると数日で定員を超える。そのため2019年から新しい試みで新竹15泊+台北15泊をセットでステイを実施し、その結果を見て今後台北のウエイトを上げていくことも検討している。

しかし我々の台湾ロングステイの基礎を築いてくれたのは紛れもなく新竹銀髪族協会で、中でも創設時のL理事長には今に至るまでお世話になり、お礼の言いようもないくらい感謝！感謝！である。

高雄でのステイ

新竹滞在中時間を作って高雄に行き、高雄銀髪族協会の協力も得ながらロングステイに適したコンドを探し回った。何回か試験的に泊まったりしながら探し、10件目くらいにＭＲＴ三多商圏駅前のコンドを見つけ、種々交渉の結果そこでのステイを実施することにした。

2014年1～２月に第1回目の高雄ステイを実施した。こちらも凄い歓迎振りで大いに盛り上り、日本のＬＳＣでも参加希望者が急増した。そのため翌2015年は定員を20名から30名に増やして実施した。しかし現地では前年ほどの盛り上がりはなくやや肩透かしであった。理由は高雄銀髪族協会全体をリードしていたキィマンが活動地を北京に移したため、リーダー不在となったのが主たる原因であった。

リーダー不在の中でも一生懸命「おもてなし」をして下さり、特に幼稚園のＹ園長には大変お世話になった。その後今日に至るまでＹ園長が高雄での交流の中心になり、一方では我々も毎年のステイで出来た人脈を頼りに交流範囲を拡げ、結果としては参加者には大変満足の行くステイを今日まで続けている。Y園長にはいくら感謝してもし切れない。（

スタート当初は高雄銀髪族協会が受け皿の中心であったが、翌2016年からはY園長個人が主で高雄銀髪族協会の方が従という状況が続いている。それでも毎年銀髪族協会の皆さんとの交流は続き何かとお世話になっていて大変感謝している。

結びに

新竹・高雄以外に台北でもお世話になっている。
こちらは銀髪族協会との交流もさることながら、銀髪族協会創設時の創設理事長、台北理事長、理事など元幹部の皆さんには今でも大変お世話になっている。

我々が一方的にお世話になる状態を打破するため、台湾からも日本に来ていただき小規模ながら日本での交流も増加傾向にある。台湾の皆さんを歓迎するため台湾でお世話になった面々に奉加帳を回して資金を作り、感謝の心を込めた「おもてなし」でお迎えしている。

この日台相互交流の流れを今後とも大切にしていきたいと願っている。

義祖父 磯田謙雄のこと（松任谷香）

義祖父磯田謙雄のこと

山梨県　　松任谷香

夫の祖父磯田謙雄は、今からおよそ80年前、台湾総督府土木局の技師として台中の灌漑工事を指揮しました。
（台湾の水利事業に大きな貢献をした日本人としては八田與一氏が有名ですが、義祖父はその八田氏とは同じ金沢出身、さらには四高ー帝大ー台湾総督府と全く同じ経歴を歩んだ6歳後輩に当たります。）

標高が高い川の上流から取水し、 22カ所のトンネルと14カ所の橋でつなぎ、3本の逆サイフォン水管で谷を越えて、広大なサトウキビ畑に水を引く（灌漑面積およそ800ヘクタール）という大がかりなプロジェクト。
当時、非常に大きな国家予算がついたといいます。
水路の全長は17.7km、1932年10月14日に通水し、白冷圳（はくれいしゅう、「圳」は“田んぼのほとりの溝、水路”の意。）と命名されました。

こちらが逆サイフォン水管。
写真ではわかりにくいのですが、このジェットコースターのような水管を水が下り、動力なしで向かい側の山の斜面の水路を駆け上がるのだそうで。
つまり、この写真には向かい側斜面は写っていませんが、水管の全体像は巨大なV字型になっています。
現地では“倒虹吸管”と呼ばれています。

確かに。

義祖父の故郷である金沢の兼六園の辰巳用水にもこの逆サイフォンの仕組みが用いられているそうで、おそらくそこからヒントを得たのではないかと推測されています。

この白冷圳は今もなお大地を潤し続け、椎茸、果物、花卉、コヒーなど、さまざまな作物が栽培されていました。
台中市街から車で小一時間ほど山路を登ったところに開けるこののどかな農地には、八ヶ岳に似た涼しく爽やかな風が吹いていました。
標高500mほどだそうです。

1999年に台湾大地震が起きた時、この水路の一部が破損し、地域の人々は非常に水に不自由することになりました。
このことをきっかけに水路の恩恵が改めて見直され、以来毎年水路の開通した10月14日に感謝祭が行われることになったそうです。地元のひなびた道教のお寺の境内で行われる、小さな素朴な、でもとても心のこもったお祭りです。
磯田謙雄の遺族として、私たちも本当に温かく迎えていただきました。

白冷圳開通81周年を祝うケーキ。（お祭りのお土産にいただいて、ホテルに戻って箱を開けてみて
思わずわっと歓声を上げてしまいました。

なんてあたたかい、心のこもったケーキで
しょう。

さらにこのたび、義祖父の功績を後世に伝えるために銅像が建立されることとなりました。
銅像といっても威圧的なものでなく、水路のほとりに腰をかけて自身の作った逆サイフォン水管をゆったりと眺めている姿。
とても親しみやすい感じがしていいなと思いました。
制作に携わられた関係者の方々がふさわしいデザインをよく練ってくださったんだなぁと、やっぱりここでも心が温かくなります。

（※義祖父と一緒に並んで）

（※磯田家親族で記念撮影）

台湾には「飲水思源」という言葉があり、“水を飲む者はその源を思う”という意味だそうですが、今回現地を訪ねてみて、本当にその言葉が生きていることを実感しました。

それにしても、台湾の人はどうしてこんなにも情が深く温かいのだろう？と思わずにはいられません。
日本側が植民地統治時代の過去を風化させる一方で、80年も前に生きた日本人に対する“恩を忘れない”台湾の人々。

台湾と日本のことをもっといろいろ知りたくなりました。

2013/10/20

私と台湾(傳田晴久)

「私と台湾」

台南市　傳田晴久

1. はじめに

昨年でしたか、「臺中伍円の會」から「私と台湾」の原稿募集の声がありましたが、忙しさにかまけて書きそびれてしまいました。この度、「私と台湾その二」の企画があると伺いましたので、改めて「私と台湾」を書かせていただきます。

　今でこそ、台湾は日本にとってなくてはならない、極めて重要な国であると認識しておりますが、初めて台湾の土地を踏んだ時は全くひどいものでした。

2何も知らずに台湾へ

私が台湾を知り、台湾の地を踏んだのは今から約40年前の1979年6月が最初です。当時の私はコンピュータシステム導入を指導する経営コンサルタントでした。台湾の桃園にある日系の企業がコンピュータを導入するので、それを支援してほしいという要請を受けての来台でした。空港を降り立った時、むっとするような暑さが忘れられません。出迎えの会社の日本人に連れられてホテルに直行、荷物を解く暇もなく、そのままレストランへ連行されました。そこには会社のお偉いさんをはじめ、20人ほどの社員がおられ、経営会議後の慰労会が始まる所でした。
いきなりその席で、会社の皆さんに紹介され、挨拶を求められました。私は日本語で、次のような挨拶をしたことを覚えています。「今日から中国人の皆さん方とご一緒に仕事ができることを大変うれしく思います。」その場には、駐在員の日本人が数人おられましたが、多くは台湾の方々でしたので、台湾人の課長さんが通訳してくれました。皆さん、妙な顔をされていましたが、私のあいさつが終わると、一応は拍手をしてくれました。

私はその当時、中国と台湾が同じと思っていたのです。後にいろいろ勉強しましたので、私の挨拶はいわゆる「トンデモ挨拶」だったことを知りました。

この仕事は約5年間続き、毎月１回、約１週間の滞在でしたが、一緒に仕事したメンバーは日本語を話せる台湾の若者だったために、私の北京語も台湾語も上達するはずもありませんでした。当時は蒋経国総統の時代で、まだ戒厳令下でした。この間、私は反日、嫌日の噂を聞くこともなく、そのような態度にも接したことはありませんでした。また、台湾と中国との関係についてもほとんど勉強しておらず、ただ台湾の皆さんが親切に、人懐こく接してくれるものですから、能天気にも台湾は良いところだ、一度は住んでみたいものだなどと思ったものでした。

3 その後いろいろ知るようになり‥‥

定年退職が近づく1990年代後半、いわゆる保守系の月刊誌を読み漁り、いろいろ勉強しました。韓国の板門店や民族独立記念館、大陸の南京大虐殺記念館、盧溝橋の抗日戦争記念館、ベトナムのゲリラ戦跡、沖縄戦跡国定公園などを見学するツアーにも参加しました。そして定年退職した翌年（2001年）の夏、「日本精神あふれる台湾を訪ねて」というツアーに参加し、10数年ぶりに再び台湾を訪れました。

このツアーの同行解説者は井上和彦さんという方でした。2019年現在、彼は保守派言論人として活躍されていますが、当時はまだ駆け出しの頃かと思います。当時、井上さんと蔡焜燦さんは懇意にしておられたようで、蔡さんは井上さんを確か「息子」呼ばわりされていました。ツアーの名前が「日本精神あふれる台湾を訪ねて」というのは、多分蔡焜燦さんの「日本精神（リップンチェンシン）」からとったのでしょう。訪問先は、烏来の高砂義勇隊慰霊碑、蔡焜燦さんの工場、台南の飛虎将軍廟、左営の海軍基地、大湖の東方技術学院（現在の東方設計大学）等でありました。

４烏来の高砂義勇隊慰霊碑

昔、「台湾と日本・交流秘話」（展転社）のグラビア写真「烏来の高砂義勇隊慰霊碑」の林立する日の丸の旗に度肝を抜かれたことがありました。その慰霊碑を見に行く機会が生まれたのです。バスで烏来に着き、烏来の老街を歩き、トロッコに乗って白糸の滝（瀑布公園）まで行きました。そこから急な階段を登って行き、演舞場（原住民タイヤル族の歌や踊りを見せる）の裏手に入ると、そこに日の丸がたち、高砂義勇隊の慰霊碑がありました。日本では最近祝祭日であっても日の丸を掲揚する家はほとんど見られないので、異国の地で日の丸をみると思わずこみあげてくるものがあります。

ツアーメンバー一同、慰霊碑の前で慰霊の儀式を執り行いました。民族衣装をまとい、羽飾りの冠を付けたリムイアベオさん（日本名・秋野愛子/中文名・周麗梅）が挨拶されました。彼女が高砂義勇隊の慰霊を思い立ち、経営する会社の所有地に慰霊碑を建立されたということでした。周麗梅さんは「酋長の家」という土産物屋さんを経営されており。そのお店で歌を歌ったり食事をしました。この時拝礼した慰霊碑はその後、あのSARS事件のあおりを喰らった管理会社の倒産により一時撤去、移設再建、さらに高金素梅（原住民枠で立法委員になっている反日人士）らによる訴訟問題など色々の経緯を経て再建されましたが、2015年8月8日の台風「蘇迪勒」による土石流によって破壊されてしまいました。2019年現在、残念ながら再建の見通しは立っていないようです。

５蔡焜燦氏の歓迎パーティ

烏来の高砂義勇隊慰霊碑訪問のその晩だったと思いますが、井上さんを息子と呼ぶ蔡焜燦さん主催の歓迎会が、国賓大飯店で開催されました。20数人一卓という大変大きなテーブルでした。私の隣に座られたのが陳絢暉さん、友愛グループの会長さんで、そのお隣が王得和さん（友愛グループの総幹事）でした。蔡焜燦さんは丁度向かいに座っておられました。歓迎の辞、乾杯、スピーチが続き、友愛会の王得和さんが、私にとっては大きな転機となるスピーチをされました。「今後、今迄の様な日台関係を期待してはいけません。親日、愛日の人々は減っています。若者は必ずしも親日ではありません」とのことでした。このスピーチが、私が台湾に住もうと思ったきっかけとなりました。台湾に住んでみたいという思いは、前述のように、今から40年ほど前に一度ありましたが、しかし、その桃園での仕事が終わってから定年退職するまでは正直言って台湾に対する関心は大きくありませんでした。「台湾は（反日教育の結果）親日家ばかりではない」事を知り、日台交流に貢献したいと想いました。台湾は日本にとってなくてはならない国、日台は「運命共同体」であり、もし台湾が中国に吸収されたら日本は立ち行かない。シーレーンを守らねばならない。その為には何ができるか。

6日台交流のために

色々考えた末、「そうだ、台湾の若者に日本を知ってもらい、日本を好きになってもらうのが一番いい。その為に台湾の若者に日本語を教えよう。」そこで日本語学校を経営しておられる金美齢さんに相談し、日本語教師になろうと志しました。金美齢さんは言下に「あなたねえ、日本人だからって日本語教えられるものではないわよ。うちの学校に入りなさい。」と言われて、半年間の訓練を受けて、台湾に来ようと思いましたが、これは浅はかな考えでした。

子供に日本語を教えるには文法の知識はいりませんが（もちろんあった方がよい）、日本語に限らず、成人に言語を教えるには「文法は必須」ということを後ほど知りました。成人は理屈で覚えるんですね。私は国文法は全くダメ。高校の国語の授業のとき、国語の教師に「伝田さん、如何して国語を勉強しないの？」と言われたくらいでした。もう一つ、日本語教師は無理ということを思い知らされたのは、「台湾の北京語」出版のとき、共著者の黄英甫老師に日本語の意味を十分伝えられないことを実感したときです。自分の語彙の少なさを思い知らされました。台湾の若者に日本（文化）を好きになってもらう、その為に日本語を教えることはあきらめざるを得ませんでしたが、何とか日台交流に貢献したいものとの気持ちは変わりません。そこで、陳絢暉さんにお願いして友愛グループに入れていただきました（2005年5月）

7 友愛グループ

2014年10月から友愛グループの勉強会のお手伝いをさせていただいております。前任の先生方は、小濱義徳氏、廖繼思氏、坂幸雄氏が居られましたが、亡くなられたり、ご病気になられたりして、お鉢が私に回ってきました。お話を戴いた時、私より流暢に日本語を操る「日本語族」の皆様方の勉強のお手伝いなどと思いましたが、ご一緒に勉強することならできるかもしれない、但し文法と敬語の話は無しということで

、お引き受けすることにいたしました。「おばあちゃん先生」こと黄秀英さんがある時、「日本語を教えるとき、私は日本文化を教えるのだ」とおっしゃったことに意を強くしております。

8 台湾に残る「日本精神」

台湾に移り住むようになって14年になりますが、台湾にはなにか懐かしさを感じます。先に述べました「日本精神あふれる台湾を訪ねて」というツアーでお聞きした話に忘れられないものがありますので、追記しておきます。それは「台湾と日本・交流秘話」（展転社）の監修者の許国雄氏のお話です。

我々が訪問した東方技術学院は許国雄氏が創立された学校ですが、色々なお話をしてくださいましたが、つぎの言葉が心に残っています。

- 愛国心無き者に教育する価値なし。
- 君は本来良い学生だが、今のは良くない。だからビンタを三発張る。一発目は国家に代わって、二発目は父に代わって、三発目は母に代わって。
- 赤チン教育より、痛みのあるヨードチンキ教育のほうがいい。戦後の日本は赤チン教育ばかりやっているからダメなんだ。
  そう語る氏が創立した学校の中の一室に「日本の間」があり、床の間に「天照皇大神」の掛け軸が飾ってありました。当時新幹線の工事が始まっていたかと思いますが、「今度新幹線が出来るが、新幹線の台南の駅前に東方大学を設立し、日本研究所を設立する」との夢を語っておられました。なお、許国雄氏は米国のカーター大統領と親しくされており、例の「台湾関係法」制定に尽力されたとのことでした。
-
- 9おわりに
- 台湾についての知識を何も持たずに来台した私でしたが、その後いろいろ勉強するうちに、日本にとって台湾は如何に大切な国か、台湾にとって日本はどういう国かを知るようになりました。台湾の若者に日本を好きになってもらおう、その為に日本語を教えようという夢はあきらめざるを得ませんでしたが、日台交流促進のための一助になろうかと友愛会や台湾歌壇に入れていただき、色々な方々と交流させていただいております。
-
- しかし、年々年をとるのは自然の流れ。「傘寿」は数え年の80歳の意ですが、ついに私もそれをもうすぐ超えることになります。お蔭様で気持ちだけはしっかりしているつもりですが、身体の方

に色々気になる兆候が出てまいりまして、何時まで「日台交流促進への貢献」が出来るのか、心配になり始めております。命は死ぬまではあると思いますが、人様にご迷惑をおかけしてはいけないとも思いますので、そろそろ日本に戻らねばならないかと考えている今日この頃であります。

（2019.11.28記）

陳樹菊さんのお話（台湾通信）

陳樹菊さんのお話

2008/05/05台湾通信

1．はじめに

先月初め(4 月 6 日)の「自由時報」紙に「善心菜販陳樹菊退休養病」（親切な野菜売りの陳樹菊さん、退職し、療養生活に)という大きな見出しの記事が載っていました。

2．陳樹菊さんとは?

台湾通信 No.48 では、陳樹菊さんについて、
「台東の野菜売り 50 年の陳樹菊オバサンは、
どこぞの「札束積上げショウ」(陳光標のこと)の
対極で、毎日の売り上げから 1元、2元と貯め始め、
100万元になると貧しい人や学習する人を救済し、
已に 1000 万元を越えている。彼女は目立つ事を
嫌い、メディアの訪問も断っているが、去年(2010 年 5 月)『世界で最も
影響力ある 100人』に選ばれた。」と紹介しました。

维基百科(ウィキペディア)によりますと、陳樹菊さんは 1951 年雲林県の生まれと言いますから、今年 67 歳ですが、今迄の人生はいろいろ大変だったようです。7 歳の時、台東県に移り住んだが、小学校卒業後母親が難産で病院へ行く途中、母子ともに亡くなりましたが、病院に支払う保証金を集めるのに苦労したと言います。その後、7人家族を養うために学校を中退、父親の八百屋で働き始めた。18 歳の頃、三弟が重病(流感)で亡くなりましたが、この時仁愛国小の人々が入院治療のための募金をしてくれました。その後、二弟も交通事故で亡くなったそうです。この時、こうした辛い悲しい経験を通して、色々な方の善意を受け、将来その善意に応えたいと思うようになりました。

3．彼女の献金活動の数々

1993 年父親が病死した後、建設計画中の仏光学院に 100 万元(約 370 万円)を寄付しました。

1997 年仁愛国小に設立された「急難救助奨学金」の為に 100 万元を寄付し、数年前に受けた援助にお返ししました。

2005 年母校仁愛国小の図書館建設の為に 450 万元(約 1650 万円)の寄付をしました。また、当地の「阿尼色弗子供の家」の孤児 3 人を養子として引き受け、100 万元を寄付し、さらに毎年 3 万 6 千元(13 万円)を定期的に寄付することにしました。

また、彼女はかつて 1000 万元(3700万円)を目標に預金し、困窮者の基本生活を支援するための「基金会」を設立すると表明しました。

4. そんな余裕はどこにあったのか?

過去 20 数年間に寄付した金額は 1000万元を超えていますが、いったいどこにそんな余裕があったのでしょうか。2014年に BBC(英国放送協会)がインタビューしていますが、彼女の簡素なライフスタイルにその答えがあるとしています。

彼女は仏教徒で、慎み深い菜食主義者で、毎日の食事はご飯と麺筋(生麩の加工品)で済ませていました。ある新聞記事では、彼女は大変な倹約家で、普段の食事は豆腐をおかずにした醤油の混ぜご飯で、最も贅沢な食事は市販の弁当だと言います。その弁当も昼食時に半分、残りを夕食にすると言います。

彼女の金銭哲学は BBC のインタビューに答えて、「寄付はいくら稼いでいるかに関係なく、お金をどのように使っているかに関係します」「お金はそれほど重要なものとは思いません。お金を持って生まれてくるはずもなし、死んで持って行けるものでもありません」

5. 「数多くの表彰」

陳樹菊さんは 2010 年、米国の雑誌「タイム」が毎年選ぶ「世界で最も影響力のある100 人」に選ばれましたが、同時に、フォーブスアジア誌の「48 人の慈善活動の英雄」にも選ばれました。更にリーダーズダイジェストは第 4 回アジアヒーロー賞を授与、台湾の教育部長(文部科学大臣に相当)はファーストクラスの教育文化メダルを授与しました。そして2012年、フィリピンのアキノ大統領はアジアのノーベル賞と言われる「マグサイサイ賞」を彼女に授与しました。この賞はフィリピンの大統領ラモン・マグサイサイ(1907-1957)を記念して1957 年に創設された賞で、アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を果たした個人や団体に対して贈られますが、日本人でも受賞した人は、黒沢明、川喜田二郎、緒方貞子など多数おられます。

驚いたことに、陳樹菊さんは頂いた賞金 50,000 米ドル(約 540 万円)を台東馬偕病院に全額寄付されました。

6. 何故退職を

2018 年 4 月 6 日の自由時報にその経緯が記されていました。彼女は毎朝午前 3 時には店を開き、他の店が閉まった後も夜の10 時まで野菜を売っていた、それも年中無休であった。今年の 1 月 15 日、店頭で倒れ、救急車で病院に運ばれたが、盲腸炎をこじらせており、ひどい状態であった。しかし、手術の結果一命を取り留めることが出来た。退院後、再び店を開こうとしたが、みんなに止められた。退院後、健康は回復して来たが、市場での永年にわたる重労働がたたり、脊椎を痛めており、一時は歩行も困難であった。彼女は店を続けることをあきらめ、店の経営を甥っ子に譲ることにした。

7. 彼女の希望

彼女は子供の頃、母親と弟が医者にかかるお金がなく命を失ったのを見ており、その時以来、貧しい人が医者にかかれるよう助けたいと願ってきたが、今やそれを実現する時ですと語っています。

台湾は現在、健康保険制度がありますが、それでも多くの弱者の中には 100 元(約 360円)の「掛號費」(初診料)を払えない人がいます。彼女の望みは、基金会を設立し、病院に行きたくても行けない人々が容易に行けるようにすることです。

8. 「えにしの会」

陳樹菊さん物語の構想を練っているときたまたま自由時報の「自由広場」（読者投稿欄）に、「台湾にも“えにしの会”が必要だ」という投稿が目につきました。中文の中の赤いひらがなの文字が目立ったのです。

国立台北大学名誉教授の孫炳焱氏はNHKの報道番組（78歳の癌患者が入院・手術の保証人がいないので困っていたが、“えにしの会”の代理保証人のお蔭で無事手術を受けられた）を引用して、台湾も高齢化社会に入っており、日本の社会問題は台湾の明日の問題になる可能性が高いので、出来るだけ早く対処する必要があると訴えておられます。

数日後の同欄に、別な教授が賛成意見を投稿され、「自分が米国に留学しているときに息子が突然病気になり、高額な手術の金に困ったが、医師や病院付属の慈善団体のお蔭で助かった」とのことでした。

念のため、「えにしの会」の HP を見ますと、「引越しや入院時などに必要な保証人となる身元保証支援、日常の暮らしの生活支援から万一のための支援、そしてお亡くなりになった後の葬儀及び納骨支援までのサポートを行う」ことを目的としているとのことです。

私は台湾、日本で数回緊急入院したことがありましたが、お蔭様で何れも友人や身内が保証人になって下さり、事なきを得ました。もし、あのとき保証人になって下さる方が居られなかったらと考えるとぞっといたします。

9．おわりに

2016 年 2 月、「保育園落ちた 日本死ね!!!」とツィートした人があり、話題を呼び、その年の流行語トップ 10 に選ばれました。発言に同感する人、同感しない人の意見を読んでいたら次のような一文がありました。

「正義に酔って他責的主張を叫ぶより、問題解決のため自分にできることをした方が建設的では。」

陳樹菊さんは大変つらい人生を送って来られたようですが、その間に受けた多くの人々の善意に感謝し、自分にできることを数十年にわたって続けてこられました。残りの人生で、「基金会」を作り、困った人々の役に立ちたいということですが、「えにしの会」は一つのモデルでしょうか。

（文責：伝田晴久）

日本の家庭料理教室を主宰

～台湾人のおおらかさに生かされて

台北市　長浜智子

2002年、結婚のため台湾に来てはや18年。24歳で中国へ留学。その後、香港で４年ほど仕事をしていたため、海外生活が日本生活の期間を追い越しつつあります。

出産し子育て一色だった頃、外国人である私が、異国の台湾でできる仕事は何だろうと日々悩んでいました。折角だから会社勤めでなく、自分の好奇心や興味が、仕事に繋がっていくような仕事をやってみたいけれども、果たしてどうすればよいのか、検討がつきませんでした。当時、近くの市場に行っては、新鮮な食材を買ってきて、料理することがささやかな楽しみでした。それから台湾のCOOPである主婦連盟で、地元の方に教えるチャンスをいただき、更に社区大学やお料理教室で、日本の家庭料理を教えるように。日本料理は素材の味を活かした調理が特徴で、調味料は最低限しか使わないため、料理としては薄味です。また天麩羅や唐揚などの揚げ物や、炒め物を除き、多くの料理では油の量がほぼゼロに近く、とてもヘルシーです。台湾と日本は生活習慣など共通点は多いけれども、料理の仕方は大きく異なります。醤油や味噌など調味料の違い、そして油の使い方。食材の切り方、盛り付けなども違います。こちらでは日本料理が大人気で、日本料理屋の数も多く、皆さん頻繁に日本食を召し上がっておられます。ただそれを家庭で作るかというと、なかなか敷居が高い様子。そこで皆さんは料理教室で習うと、すぐ家庭で作られています。生徒さんが家で作った日本料理の写真を見せてくれたり、家族から美味しいとほめられたと聞くのが一番うれしいです。また皆さん好奇心が強く、授業は真剣そのもの。質問もばんばん飛び交います。生徒同士お互いの成果を褒めあったり、私に対しても常に敬意を持ってくださり『料理教室で習った知識が役立っている』、そして『料理がとても美味しい』ということを具体的な言葉で伝えてくれます。台湾の方はどなたも褒め上手です。しかも周りの台湾の友人を見ても、後ろ向きな発言をする方にお会いしたことがありません。ここは日本と大きく異なる点です。例えば料理教室で私が何かの材料を忘れた時は、皆さんおおらかに『沒關係』と助け舟を出してくれます。台湾人は不足を嘆くのではなく、ない中でどのようにその場をしのぐか、すぐ方法を考え行動に移したり、小さな点を気にせず前進するところがすばらしく、助けてもらってばかりです。日本に住んでいると『私はもう何歳だから』『何々ができないから』とマイナス思考になりがちですが、台湾の女性はパワフルで、自分の人生をあきらめたり、妥協するというところがなく、やりたいことを追求している女性が多いです。おかげさまで、私は単にお料理を教えるだけでなく、同時に台湾の皆さんから台湾の文化や習慣、そして生きる知恵までも教わり、とても前向きに生活しています。料理が専門でない私が料理の先生として働いたり、縁があってお料理の本を２冊も出版できたことは、台湾だったからこそではないかと考えると、感謝の気持ちで一杯です。これからも日本の家庭料理を通じて、台湾と日本の交流に携わっていけたらと思います。麗しの台湾、そして台湾人の方々に出会うことができ、心より幸せを感じています。

～台湾の菜市場は『昼間版の夜市』～　台湾の市場は、まるでお祭りの屋台のようで、毎日開いている常設の店と、週1日もしくは数日だけ出店している店が混在しています。通常、市場が休みの月曜日でも、普段、肉や魚を売っているお店の場所を違う人が間借りして、アクセサリーやお皿などが売られています。曜日によってお店が少しずつ変わるため、1週間ぶっ通しで市場に行って、初めてその全貌がつかめるのも魅力です。肉、魚、野菜、果物などの生鮮食品のお店の間に、惣菜、乾物、花、豆腐、服、下着、傘、台所用品、食器、便利グッズなどのお店が挟まっていて、肉屋の隣で、下着サンプルを身につけて実演販売するお姉さんがいたりして、おもちゃ箱のようです。また野菜、果物の種類の移り変わりを見ていると、都会暮らしでも季節が感じられます。皆さん、是非台湾お市場を巡ってみてください。

台湾と私（谷憲治）

台湾と私

東京都　谷憲治

以前、ある台湾人から「日本精神(にっぽんせいしん)」という言葉を聞いた時は、まだ年端もいかない子供の頃でした。その後、年を追うごとに多くの台湾人と世界中で知り合うこととなりました。台湾人に対する特別な意識はありませんでしたが、皆明るく屈託のない笑顔の持ち主でした。しかし更にその後、感動的な出会いに恵まれることとなります。

それは、インターネットを通して知り合いになった南投市の方の紹介でした。その方が来日した時に「南投市に日本語世代の方がいらっしゃるので来てみないか」と誘われたのです。厳しい時代を生きぬいた人生の大先輩に逢わせていただけるということで、現代の乱れた日本語を話す私は、失礼な事を口走ってしまわないか恐る恐る南投市を訪れました。南投市中興新村は非常に暖かく、素晴らしい景色に魅了されました。特に目を引いたのが街路樹として植えられていた楠です。樟脳の原料として日本時代に楠が植えられた話は有名ですが、私にとって楠の並木は珍しく、木漏れ日がとても美しかったのです。

そして約束していたレストランに向い、緊張の一瞬となりました。大先輩は非常に優しい笑顔で私を迎えてくださり、「日本人と話すのは何年ぶりだろう」と仰っていましたが、先輩の日本語での冗舌ぶりには驚かされました。物事を考える時は、まず第一に日本語で考えると微笑んでいました。驚いたのも束の間、翌日はもう一人の大先輩を紹介され、「隣組」など数々の日本の歌を一緒に歌わせていただきました。東京生まれ東京育ちの私にとって、時空を超えていつか来たことがあるやも知れないと想うほど、懐かしさを感じました。

その後、南投のみならず、台北、台中、台南、高雄、嘉義、宜蘭など台湾各地を訪れることとなり、台湾人の温かさを更にしみじみと感じるようになりました。そんな中、忘れもしない2014年、多くの台湾の友人達の勧めで、運良く封切り直後の映画KANOを見ることになりました。台中の映画館は長蛇の列で、その人気に驚きましたが、その感動的名作映画の中で自分と台湾との繋がりを見つけ、人知れず心を温めました。

台湾が日本だった頃、1931年夏の甲子園(第17回全国中等学校優勝野球大会)において準優勝した台湾南部の嘉義農林学校(KANO)野球部の汗と涙と友情の物語は、当時を生きた人々の直向きさや純粋さを鮮やかに伝えています。実際、その甲子園大会を観戦した菊池寛は、新聞のコラムで「…内地人、本島人、高砂族という変わった人種が同じ目的のため協同し努力しておるという事が何となく涙ぐましい感じを起こさせる…」と述べています。

そして映画のラストシーンでは、KANO野球部各選手達のその後が説明されますが、そこにはこうありました。「ピッチャー呉明捷は1933年に早稲田大学に入学し、１塁手として活躍。当時の六大学野球において通算ホームラン７本という記録を打ち立て、その記録は1957年に長嶋茂雄が通算８本で更新するまでおよそ20年間破られることはなかった」と。なんと呉明捷は私の卒業した大学の大先輩だったのです。自分と台湾の時空を超えた繋がりに想いを馳せつつ、偉大な先輩方を見習い、日々精進したいと想う気持ちが強くなりました。そして、それが「日本精神」なのかも知れないと想うようになりました。

王育徳博士

王育徳博士

2018/09/12

過日「台南に出来る王育徳記念館に行ってくるよ。」と言ったら台湾通の友人から「王育徳って誰？何をやった人なの？」と聞かれどんな人なのかを教えてあげました。

故王育徳博士（1924-1985）は台南の出身。台北高等学校を経て東京帝国大学に学んだが、日本の敗戦により台湾へ戻りましたが。兄の王育霖（1919-1947）が二二八事件で行方不明となると、身の危険を感じ日本へ亡命し、東大に復学したのです。

博士は情熱的な学者で、台湾語研究では第一人者でもあり、また一方では、雑誌『台湾青年』を創刊し、台湾独立運動に身を投じた情熱的な政治活動家でもありました。また、台湾籍元日本兵に対する日本政府の不公正な態度に憤り、その補償問題にも熱心に取り組んだこともありました。博士は台湾独立派のレッテルを貼られ台湾当局からブラックリストに載せられ、終生にわたって台湾に帰ることが出来なかったのです。2008年9月９日台南に王育徳記念館が開館し、ここにようやく博士は里帰りを果たすことができたのです。

そして後日、図書館に行って日本語書籍コーナーの棚の中から『昭和を生きた台湾青年』というお目当ての本を見つけました。博士に興味のある方にお勧めいたします。娘さんの明理さんは次のように本の末尾に記していました。

「2011年現在の台湾は国連にも国際機構にも加盟できない。自分たちの本当の（台湾）という国の誕生する日を今か今かと待っていることだろう。」

（そして、今日オートバイで走っていると目の前に

「台独」と記しその下に「自分は台湾独立を主張

します」と記した文がありました。

これは偶然だったかもしれませんが、奇妙な

出来事でした。　）

●今回完成した記念館のある場所は台南公会堂の裏手にある呉園という名園の池のほとりにあり今後台南観光スポット地としてきっと多くの人が訪れることでしょう。

張学良記念館

張学良記念館

2018/09/23

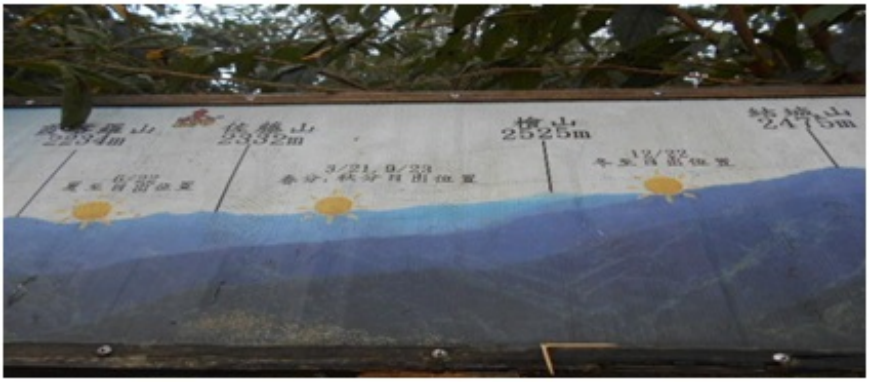
先週雪霸国家公園へバス旅行に行ったときの帰り道「張学良記念館」に立ち寄りました。
どうしてこんな山の中に記念館があるのかと言えば、張学良は1936年に蒋介石を拉致し
監禁した西安事件の主役で、反逆罪で逮捕されそのまま軟禁状態されて1946年に台湾に
やってきて1957年までここ清泉温泉（日本時代は井上温泉）で過ごしたのです。
トイレ休憩の３０分間の機会を利用して駆け足で記念館を覗いてみました。
　記念館は木造の平屋建ての日本家屋風でした。記念館内部と記念館の周辺には、張学良に関する資料や写真などが多数展示されて映像コーナーもありました。夫人と一緒の写真などを見ながら、世の中から完全に隔離され、生まれ育った中国東北部からもはるか離れた台湾の交通の不便な寒村で過ごした11年間は彼にとってそれはどんな日々だったのだろう等と、ふと思いながら記念館を後にしました。

-

台湾に日本人名の山が

台湾に日本人名の山が！

2018/09/23



この前雪霸国家公園に行った時に日本人の名前がついた山～佐藤山（2332M）、結城山（2475M）と二つの山を発見！
佐藤さん、結城さん家族が台湾に来て自分の名前のある山に登ったらきっと忘れられない思い出になると思う。

　また阿里山にある祝山は民政長官だった祝辰巳からつけられた　　山なんだそうですよ。へえ～知らなかったなあ。

- またこの記事の書き込みに「苗字ではありませんが、息子の名前が「ゆうき」と言います。日台ハーフなので、同じ名前の山があるのは嬉しいですね。」とありました。ちゃんと見ている人は見ているんですね。

台中花博

台中花博

2018/11/28

今月3日「2018台中花博」が開幕した。土日は混雑すると思って、月曜日の今日の午後、三か所の会場ある中で一番近い豊原会場を訪れた。豊原駅から無料のシャトルバスに乗って５分ほど、川沿いの会場だ。
竹跡館と呼ばれている竹で作った建物の中で撮った写真２枚からわかるように、採光性と通風性があり、外は30℃でもこの中は窓なしでも快適な空間だ。川べりで花を見ながら散策すること３時間。帰りは駅まで10分歩いたため今日は一万歩達成できた。

前回見た豊原に引き続き残りの后里、外埔会場を見に行った。台中から各駅停車の電車で后里へ。ここから送迎
バスに乗って二か所の会場を回る。天気も寒くなく暑くなく人出も少ない平日を選んで正解だった。
后里会場に入ると、入口には赤い球形が。この花博のシンボルだそうだ。球形には空洞があり、この空洞にある赤い布が全自動で花びらのように閉じたり開いたりするのだ。

この球形の説明文に「一起來台中聆聽花開的聲音吧」（一緒に花が開く時の音に耳を澄まして聴いてみましょう。）と書いてあった。
そして入口近いパビリオン発現館に入ると白冷圳の展示がしてあった。また園内には珍しい建物やパッションフルーツ（百香果）の花、クリスマスの花として有名なポインセチアなど色とりどりの花などを見ながら散策した。

台中と日本人建築家

2018/12/20

（1）伊藤豊雄さんと台中国立歌劇院

伊藤豊雄さんが手がけた台中国立歌劇院は、台中に来たら必見の場所。2009年着工し、2016年に完成。総工費は43.6億元。この建物の最大のポイントは、カテノイドと呼ばれる三次元曲面の構造体だという。床、壁、天井が切れ目なくつながり、ホール、ホワイエ、ロビーといった空間が水平垂直に枝分かれしながら連続する。楽器や動物の器官を思わせる、有機的で、これまでにない構造だ。「新しい世界９大ランドマーク」のひとつとして称えられている。

（国立歌劇院公式ＨＰ...
http://jp.npac-ntt.org/）

（2）安藤忠雄さんと亞洲（アジア）大学

2015年にアジアベスト大学ランキング100（英タイムズ・ハイヤー・エデュケーション誌）に選ばれるなど、台湾を代表する私立大学の亜洲大学。創始者である蔡長海学長が自ら説得して、安藤忠雄に設計を依頼したのが「亜洲大学現代美術館」だ。彼にとって台湾で初となる美術館は、着手から6年の歳月を経て2013年に完成した。

（追記）
2019年2月に訪れた松山市にある坂の上の雲美術館も三角形の建物で安藤忠雄さんの作品でした。

（またキャンバス内の行政ビルも西洋式の建物で
人気があり結婚撮影のために訪れる人が多い。）

（3）隈研吾さん

昨日見に行った台中花博の后里会場に、建築家の隈研吾さんが設

計した「台開三角積木概念館」がありました。同館は企業パビリオンとして、不動産開発大手の台湾土地開発が手掛けたもので、積み木をモチーフに、三角形の積み木の構造で子供らしさと創造力を表現したとの市の説明でした。

（→2022年完成予定の勤美術館も隈さんが設計されました。）

今まで知らなかったんですが、2020年の東京オリンピックのメイン会場となる新国立競技場の設計した有名な人なんですね。

（簡略）1954年（昭和29年）生まれ。
東京大学教授。
株式会社隈研吾建築都市設計事務所主宰。
木材を使うなど「和」をイメージしたデザインが特徴的で、「和の大家」とも称される。
台湾の花蓮にあるスターバックも彼の作品で、
輸送コンテナを用いたユニークな設計。

花蓮の旅

2018/12/21

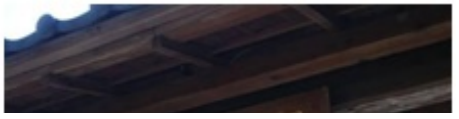
（1） 東華大学

東華大学は1994年に出来た台湾で最も新しい総合大学。交通の便が悪く、花蓮市内からバイクに乗って南下すること小一時間。大学は251ヘクタールもある本当に広い敷地だ。周りはあるもの以外は何もない所。でもキャンパスの景観は素晴らしい。まるで田園の中に別荘があるという感じ。キャンバス内は自転車が唯一の足代わり。ここではスマホが唯一の友達なのかも知れない。台湾での大学巡りも面白い。

（2）慶修院（花蓮県吉安郷）

前身は1917年（大正6年）川畑満二氏が建てた「吉野布教所」。

戦後は慶修院と改称し、境内には、百萬遍石碑、百度石、石佛などがある。また裏手には日本時代の吉野村の写真などがあった。この他長寿の道、人生訓などもあり、なるほどと頷いてしまう。



（　→右図の読み方は下記の通り

（気は長くして、心を丸くし　腹を立てずに

横にして　口をつつしめば　命長くなり
）

牡丹社事件

牡丹社事件

2019/1/15

日本統治時代（1895年～1945年）に発生した霧社事件は以前「セデックパレ」の映画になり大抵の人は知っていますが、牡丹社事件のことは知らない人が多いのではないでしょうか。

南部めぐりのバス旅行の2日目は最初の休憩地点の牡丹社にやってきました。ここは日本人が最初に台湾の原住民と接触し不幸な事件が起こった場所なんです。いわゆる牡丹社事件で、前に訪れた時はなかったきれいな公園になって整備されていました。その事件とは、琉球王国時代の1871年、宮古島民の乗った船が首里王府に年貢を納めた帰り、台風で台湾南部の八瑶湾（現九棚湾）に漂着。乗員69人のうち3人は水死し、残り66人は原住民族、パイワン族の集落である高士仏（くすくす）社に助けを求めたのです。しかし、双方言葉の問題で誤解が重なり54人は殺害され、生き残った12人が助けられ、中国の福建省を経由し那覇に帰ったのでした。同事件がきっかけとなり、明治政府は1874年に「台湾出兵」を行ったのでした。

（以下は後日見た作家・平野久美子さんのネット投稿記事です）

牡丹社事件と「水に流す」知恵

日本語には「水に流す」という慣用句がある。単に「忘れてしまいましょう」というのではない。清浄な精神を重んじる神道の「おはらい」に由来するとおり、「過去のわだかまりや悪い感情を一掃した上で、関係や生活を一新する」という意味を含んでいる。

この慣用句をまさに地でいったイベントが、2005年に日本と台湾の間で行われた。1871年に起きた琉球（りゅうきゅう）民遭害事件の被害者遺族と、台湾側の加害者遺族との和解劇だ。台北で、この予告ニュースをたまたま見た私は、双方のわだかまりをそんな簡単に「水に流す」ことができるのだろうかと、半信半疑の思いを抱いたものだった。

というのも、この事件は根が深い。那覇から宮古島へ戻る途中の貢納船が、台湾南東部に漂着。上陸後

に迷い込んだ牡丹郷で、54人の琉球人がパイワン族に殺害された。この悲劇を利用して3年後の1874年、明治政府は台湾出兵を強行した。牡丹社のパイワン族は、近代的な武器で攻め入った日本軍に老若男女の区別なく掃討され、生活の場も奪われて悲惨な目に遭った。以上ふたつの出来事をセットにして『牡丹社事件』と言い、後の琉球王府廃止による沖縄県設置（1879年）や台湾領有（1895年）の発端となった。

牡丹社事件の日台大和解

2005年6月に、ニュースが伝えた通り和解のイベントが実現した。

　パイワン族の遺族らが、5日間の日程で沖縄県を訪れて、那覇市波の上の護国寺にある「台湾遭害者之墓」を被害者遺族とともに参拝し、その後宮古島へと渡り、市長や島の関係者らと面会。市長がパイワン族の少女をしっかと抱きしめる写真は、多くの人々の感動を呼んだ。席上、台湾側は言葉と文化の違いから生じたとはいえ、牡丹郷での殺害を謝罪、日本側は台湾出兵による侵略を謝罪し、過去のわだかまりを捨て、未来志向の友好を誓った。『牡丹社事件台日大和解』と銘打ったこのイベントは、第二次世界大戦終結60年記念の一環として行われ、台湾と沖縄では大々的に報じられた。しかし、在京のテレビ局や新聞社の扱いは小さく、ここにも「大和」（日本内地）と「琉球」（沖縄県）の違いを私は感じた。

（牡丹社事件についての詳細は平野さんの本をご覧ください。）

彰化の農村めぐり

彰化の農村めぐり

2019/01/18

（1）香田国小

好天に恵まれた今日はいつも暮らしている都会を離れて農村地帯巡り----向かった先は彰化県の二林、ここにあるそばの花畑。でも行ってみたらすでにそばは収穫され刈り取られていました。

でも、そば畑のところにある香田国小はミニ小学校ながら環境が抜群。学校のそばに学校所有の田んぼがあり、なんとコシヒカリを作っているのです。街路樹は美人桜の木が植えてあり開花時期にはピンクの花を咲かせ、そしてそばの花は白い花が満開になると一幅の絵のようだとか。今日は暖かい天気に浮かれたかのようにモインシロチョウが舞っていました。校庭には小ヤギが三匹戯れており、全校で６つのクラス全校で６つのクラスしかない校舎は授業中のためか比較的静かでした。

（2）二林の街と渓湖糖廠（糖業鉄道文化園区）

二林のにぎやかな所にはいろいろな店あり、廟あり、市場ありですが、こんな小さい町にも日本式家屋が残っており、武徳殿もありました。

また日本時代は大和製糖株式会社だったのが戦後は台湾製糖になり製糖工場が今は五分車（サトウキビの運搬に使っていた）ＳＬなどがありました。鉄道ファンにはぜひお勧めのスポットです。

渓湖糖廠https://www.taipeinavi.com/miru/101/

製糖業を支えたサトウキビ列車！SLが引くトロッコに揺られて田舎の畑を行けば、懐かしい時代に帰ったような気がします。

台中での日本の懐かしい歌のコンサート

台中での日本の懐かしい歌のコンサート
（東洋と西洋の音楽の出会い）

期日：2019年1月18日、19日午後2時半から
場所：台中市豊原区文化中心
主催：彭明敏文教基金会、佐々木教育中心
東日本大震災で台湾に恩返ししたいと毎回コンサートを実施。
今回で40回目となる公演、佐々木菜穂子さん率いる歌劇団が
台中初の公演となりました。

前半は「どこかで春が」「望春風」「千の風になって」「北国の春」など。
後半は「十五夜お月さん」「月亮代表我的心」「荒城の月」「津軽海峡
冬景色」など日台双方の歌あわせて18曲歌ってくれました。途中バイオ
リンのソロ演奏もあり、最後はアンコールで「夜来香」「ふるさと」の
歌を皆で歌ってお開きとなりました。歌に国境なしで、音楽でお互いに
交流できます。
最後は観客それぞれが舞台に立った人たちと一緒に記念写真、ぼくは
列の最後に並んで色紙も書いてもらいました。

レンガ職人の話～あなたは何番目の職人になりたい?

今日下記のようなメルマガを読んだので、とてもいい話だと
思い、皆さんにも紹介したいと思います。

『レンガ職人の話～あなたは何番目の職人になりたい？』

中世のヨーロッパで旅人が3人のレンガ職人に出会いました。
旅人が「何をしているんですか？」って聞くと、
1人目は「親方の命令でレンガを積んでいるんだよ」
と面倒くさそうに答え、2人目は
「レンガを積んで壁をつくっているんだ。
大変だが賃金がいいからやっているんだ」と答えました。

けれども3人目は「完成まで100年以上かかる
教会の大聖堂をつくってるんだ。
完成すれば多くの信者の拠り所となるだろう。
こんな仕事に就けて本当に光栄だよ」と答えたんです。

3人のやっている仕事は一緒です。でも志が違うのです。
1人目は言われたからやっているだけで、
2人目は食べるために否応なしに働いていて、
2人とも目の前の壁の部分しか見ていない。
けれども3人目は、歴史的な事業に参加して

多くの人を喜ばせたいという目的意識を持って仕事をしている。

しかも、自分が完成を見届けることのできない
100年先を見据えて仕事に取り組んでいるんです。

ここまではご存じの方も多いんですけど、
実はこの話には続きがあるんです。

10年後にこの3人はどうなったか。

1人目は相変わらず文句を言いながらレンガを
積んでいました。2人目は、賃金は高いけど

危険の伴う屋根の上で仕事をしていました。

そして3人目は、現場監督として多くの職人を育て、
出来上がった大聖堂には彼の名前がつけられたんです。

私はこのエピソードを読んだ時に、
涙が出るくらい感動しました。

「これだ！」って。

自分は3人目のレンガ職人になりたい。

（メルマガ致知より）

令和の幕開けに

令和の幕開けに

2019/05/05

今月１日から令和となった初日の都内には改元を祝うムードにあふれていた。ぼくにとって令和の幕開けは、平成の最後に出来たばかりの本を渡すため、台中関係者に呼び掛けて新宿と大阪で食事会を開催。１日の新宿では元駐日代表の許先生夫妻も同席されて、参加者一同に『私と台湾』を贈呈。席上許先生の奥さんからも今年３月発刊された『赤いお尻のお猿さん』の本を頂きました。２冊の本を手に持って記念撮影。食事会の後は近くの喫茶店で二次会。新宿・大阪に集まってくれた台中に関わりのある皆さん有難うございました。

日本人教師の慰霊祭

日本人教師の慰霊祭

2019/05/13

今日の朝九時過ぎから新社で慰霊祭があり、臺中伍圓の會からも日本人４名参加しました。
日本人教師とは、戦前の東勢農林国民学校（新社高中の前身）の山岡栄先生のことで、
今日の慰霊祭では新社高中の校長先生らが日本語で「故郷」の歌を歌うと言う日本人に
とってサプライズの慰霊祭でした。

今から８９年前の昭和５年（1930）５月に同校の山岡先生が豪雨のため川の中州に取り残された児童を助けるために、自分の身の危険を顧みず、逆巻く濁流に飛び込み急流に押し流され溺死してしまったのです。先生が台湾に来てわずか４か月、享年29歳の若さでした。

地元の人たちは、山岡先生のために「殉職山岡先生の碑」を建て、毎年命日に追悼式を行い、そのことは教科書にも載ったそうです。そして、村人たちは、もちろん子供たちもこの碑のそばを通るたび、足を止め両手を合わせていたといいます。

終戦後は国が変わり、記念儀式は排除され、教科書からもその記述が消えてしまいました。以後、記念碑と山岡先生の夫人が植樹した二株のいぶきも、年月の経過とともに雑草の中に埋もれてしまったのです。

それから半世紀が過ぎ、だんだん当時を知る人たちが少なくなっていく中、1999年の台湾大地震後、毎年５月になると地元の団体の主催で山岡先生の慰霊祭が挙行されているのです。

そして去年からは新社高中と山岡先生の母校である愛媛県伊予農高が姉妹校となり教育交流をしているのです。
（去年山岡先生が縁となって日本側：愛媛県伊予農高と台湾側：新社高中が姉妹校となった）

楊應吟さんを悼む

楊應吟さんを悼む

2019/9/23

去る6月13日に無針バリ治療の第一人者だった楊應吟(よう・おうぎん）さんが逝去されました。享年94歳でした。戦前を知る日本語族の生き（証人をまた一人失って大変さびい思いをしています。楊さんと知り会うキッカケとなった楊さんの著作、『素晴らしかった日本の先生とその教育』を頂いた時のことは今でもはっきり覚えております。その折、妹さんの楊素秋さんも同席されており、以来親しくさせてもらっております。大正15年（1926年）に生まれた楊さんとは誕生月も同じ12月ということもあり、長年にわたってお世話になったにも関わらず急用で葬儀に参加できなかったのが心残りとなってしまいました。お詫びに今回また編集予定の『私と台湾２』の中に戦前の台湾を知らない人たちの為に楊さんが、かって日本で講演された「日本統治時代の台湾」を挿入し、謹んでお悔やみ申しあげますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

「日本統治時代の台湾」

楊應吟

私は噺家でも、歴史家でもなく、昭和の時代を生き抜いてきた日本語族の一員として、皆様にお話を致したいと思います。もともと台湾は世界一親日国家なのです。日本人の中には、いまだに台湾人と中国人の違いが分からない者が多いと聞いたので、この際にその違いを先に説明すべきだと思います。
中国は日本から３兆３０００億円（2007年末まで）のＯＤＡを受けながら、人民は誰一人知らず、感謝はおろか、その見返りが１２00基を超えるミサイルをわが台湾のみならず日本にも照準を合わせておるのです。

台湾の過去を知らない日本人は「台湾人が親日なのは、国民党の悪政と過去、日本政府の政策を比較して、日本がいいから親日だ」と言うが、そんな、浅い関係じゃないのです。実際は良い事ばかりではなかったが、統治時代にインフラ建設に、多くの日本先人達が貢献された事に対し、日本語族の親日家は、今でも此の事を高く評価し、感謝と尊敬しているのです。これが台湾人と中国　支那人の違いです。

日本は明治27年に日清戦争に勝利してから29年に下関講和条約で、清國から台湾を割譲されました。しかし、日本はすぐに台湾統治を始めることが出来ませんでした。日本に反対する数万人もの清國軍との戦闘が繰り返されておりました。
当時、台湾の台南は“府城”と言い、一歩場外へ出ると“草地”と言って、田舎の意味でもあり、未開墾の地は草や竹藪で至る所に汚水の沼があり、茅葺きの家には人もブタも雑居しておりました。この様な環境なので、マラリヤや伝染病を媒介する蚊の発生には格好な地でありました。
当時　16万9千人もいたアヘン常習患者の問題を、日本はどう処理するか、世界各国の注意の的でした。また、この悪習が日本へ蔓延することを恐れ「吸引する者は厳罰に処すべし」の厳禁説が唱えられていた中で、医学博士でもあった後藤新平は、当時の清國政府から「化外の地、瘴癘の地」と見放された荒廃の地に、阿片の麻酔、沈静、収斂作用が病気の治療に有効と認められていたので、極力反対をして漸禁説を押し通しました。

確かに、この政策は今から見ても正解だったと思います。マラリヤ、赤痢、コレラの風土病が蔓延っていた台湾で現

地台湾住民が阿片を喫煙していたのは、一つにはこの風土病の毒消しの為の生活の知恵だったとも言われています。よしんば強制的に抑えたとしても、あの酷い風土病にどれだけの犠牲が出てくるか知れません。これは、あの台湾支配に反対する数万の清國軍の平定戦で、日本軍の戦死、負傷者が僅か数百名だったのに、戦病死者4千6百名、病院に収容された戦病者は2万7千名もあったことからしても判ることでした。

新平は全島の阿片吸引常習者の容体を把握した上で、阿片を専売制にし、中毒、常習者には鑑札（吸引許可証）を出し、これらの者に限って特許店舗で販売しました。その一方で、その利益を各種衛生事業施設の資金に当てて、衛生方面の改革を行い、風土病対策、反乱を起こさずに済み、警察、軍隊の犠牲を未然に防ぎました。そして、購入が出来ることから支那からの密輸に頼らなくても良くなりました。

この事で、十七万名近くいた阿片常習者は、阿片を政府の専売とする破天荒なアイデアで新平の予想通り大きなトラブルも無しに自然と厳少し、昭和六年頃には阿片患者を捜し出すのも難しくなり、昭和16年（1941年）には0.1％に、終戦の年には皆無となりました。

私が五・六歳の頃だったと思いますが、身体のあちこちにオデキ（吹き出物）が出来易かったことがありました。普通は漢方薬房から素焼きの容器に入った膏薬を貼れば速くて二～三回、遅くても五～六回で治ってしまうのだけど、ある時足に出来たオデキが今までの膏薬を貼っても効果無く、腫れも引かずに痛みも抜けなかった事がありました。店にいた叔父さん（父の末弟）が母に「“阿片膏”を試してみては？」と提案しましたが、身内の者には阿片常習者はなく、母方の漢方医をしている厳格なお爺さん一族には、尚更阿片喫煙者はおりません。
最終的に叔父さんがやっと赤崁楼の付近、武廟脇にいる爺さんからタール状の阿片の吸い滓でもある “阿片膏”を分けて貰い、これを膏薬の様にオデキに貼ったら、不思議に三回ぐらいで晴れも痛みも消失したことを覚えております。

この様に、阿片の吸い滓までもが、抗生物質の無かった時代に使われていたのは、当時の台湾人の知恵だったに違いないと思いました。だから新平が阿片政策を「厳禁」から「漸禁」へ押し通した事は“一石二鳥”どころか“一石数鳥”の効果が有ったと言えます。

父は台南　公会堂の前に弘明電気商会を開設した1930（昭和五）年頃、店の前に下水道の工事が始まっていました。この下水道は当時の東京市に先駆けて、コンクリート製の下水道施設に整備されたのです。その結果、伝染病の根源地だった台湾から、マラリア、コレラ、赤痢の伝染病が急速に消え去っていきました。今、台湾の公共衛生で優れた実績を上げている背景には、日本の長期にわたる努力があったのです。

台湾近代化に貢献した代表的な日本人の筆頭が後藤新平でした。彼の業績は殊更私が申し述べるまでも無く、多方面に亘っております。その中で、私本人が実際に体験、見聞した小さな実例を申し上げましたが、この他にも、
台湾精糖の近代化に新渡戸稲造。 お米の改良に末永仁、磯栄吉。
烏山頭ダム建設と全長1万6千キロメートルに及ぶ用水路建設の八田與一。
電力事業に明石元二郎。
日本人も知らなかった地下ダム“二峰圳”の建設をされた鳥居信平。（親日家
許文龍氏が胸像を郷里　静岡県の袋井市に寄贈してから市長が始めて判った。）
宜蘭の“西郷堤”西郷隆盛の息子、西郷菊次郎が毎年洪水による膨大な災害を、堤防建設工事で防げたことなど、本当に素晴らしい方達が居られました。

そして、12年前の台湾中部大地震では日本から援助が来て、この度の東日本大震災には台湾から義捐金が贈られていきました。この様にお互いに助け合っていけば、明日にも素晴らしい幸せが来るものだと思います。日本と台湾は良き友達でも有り、運命共同体でもあるのです。
現在のこの良き絆を、今後も日本サイドから壊して行く事無く、せめて国民外交の面からでも、補っていく事を切に

願うしだいであります。
ご清聴有難うございました。

台湾にもある山手線

台湾にもある山手線

2019/08/03

「台湾にも山手線があるよ」と言ったらみなさん、ビックリするでしょね。
それでは、まず、台湾鉄道の台湾中部の路線図をご覧になって下さい

新竹の南にある竹南駅から線路は海線と山線に分かれ、彰化駅でまた合流しています。
まるで山手線みたいでしょう。ぼくは勝手に台湾にある山手線と呼んでいますが、東京の山手線と
違って一本のレールで繋がっていないのです。それで山線から海線へ、海線から山線へと乗り換える
時は時刻表を見ながらどこの駅で何時何分かを調べておく必要があります。知らないでいると
一時間以上も待たされてしまうのです。待ち時間を入れずに鈍行電車に乗っているだけなら
3時間余で一回りできるんですが、今回ぼくは最寄りの駅太原駅を起点として
台湾山手線一周に実際どのくらいかかるか試してみました。

のんびりと一人旅は区間車と呼ばれている鈍行電車が最適です。平日の昼間のため
乗降客は少なく、最後まで四人掛けの席を一人占めしていので、まるで
動く書斎といった感じ。文庫本を読んだり車窓からの景色を眺めたり、
音楽を聴いたり自由気ままなものです。10時39分発の電車で北上し、
約一時間後に苗栗駅の次の豊富駅で降りました。というのは、この駅が
新幹線苗栗駅に隣接していているのを知っていたからです。豊富駅は
もともと無人駅でしたが、2015年の新幹線開業のために駅舎を北に移動し、
屋根つきの連絡歩道で繋がったのです。

ちょうど昼時で、お目当ての新幹線弁当を食べたあと、12時10分発の
シャトルバスに乗り込んで前述の竹南駅に向かいました。ここの駅から
海線の電車が出発するのは1時半なので出発までスマホや文庫本で待ち
時間を過ごしました。定刻に竹南駅を出た電車は日本統治時代から

残っている駅とか、大山、日南、清水、追分など日本と同じ駅名の所
などいくつも停まりながら海岸に沿って進んでいきます。でも海のすぐそばを
通過するわけじゃありません。
海線付近での観光スポットで有名なのは高美の夕焼けです。
ここは淡水の夕陽以上にきれいだと最近うわさを聞いて
訪れる人が多いようです。（文章最後の写真）
　また車中で、ネットサーフィンしていると「台湾に行き
タイワン」の記事の写真に「青い空、青い海、青い電車」
とあり興味を引かれました。その場所とは「こんなところでした。

（日南駅）

写真はこちらのリンクからご覧ください」
台湾に行きたいわん！FB投稿ページ
https://www.facebook.com/taiwanikitai/posts/1645769262211459

九二一大地震20周年に寄せて

九二一大地震20周年に寄せて

2019/9/20

台湾大地震（台湾では921大地震と呼ばれている）が発生して明日で20周年を迎えます。台湾には日本人学校が台北、高雄、台中の三か所にあります。ちょうど20年前に台中にある日本人学校（以下台中校と言う）もこの大地震によって被害を受けて再建を余儀なくされたのです。この台中校の再建に携わった人も当時を知っている人もほとんでいなくなった現在2013年に発刊した『日台の架け橋』の中で紹介した表題の件について簡単に紹介したいと思います。

（←旧校舎）

倒壊した校舎→

99年10月7日、李総統の視察があるとの知らせに、当時の江原校長は多くの父兄・生徒を集めて迎えました。迎えに出た校長は、李総統に「江原さん。たいへんだったね。」と声をかけられて、いきなり自分の名前を呼ばれてビックリしたそうです。李総統は事前に校長先生の名前を調べておいたのでしょう。後日、李総統の心配りに感心したと語っておりました。
学校の用地問題に悩んでいた江原校長は、一校長の身分でとためらいましたが、思い切って「ご配意をお願いしたい」と陳情しました。李総統はお願いに対して「わかった。わかった。」とうなずいたのです。が翌日に三か所の用地が準備され、それが即座にかなえられるとは思ってもみなかったようです。日本では「わかった」の政治家の言葉は「何もしない」との意味だそうですが、ここ台湾では違って、李総統の鶴の一声で用地問題は解決したのです。

（再建された新校舎）

新校舎は大雅という所に決まりましたが、そこは畑であったためこれも李総統の指示で一回の申請で宅地転用が許可されたのです。用地取得のメドがつき、ことはとんとん拍子に運びました。教師の派遣は文部省ですが、学校の所轄は外務省です。予算５億円のうち７割は国が負担で、残り３割は地元の負担金となるも台湾にある日本企業などの協力を得て資金が調達できたのです。

では、地震で校舎の被害が大きく使用不可能になった状態に陥った時、仮校舎の問題はどうしたかと言えば、援助の手を差し伸べてくれたのが、エンゼル幼稚園だったのです。

この幼稚園には日本人の子供を対象にした日僑班がありここの卒業生は日本人学校に入学すると言う縁があったからです。校長室まで用意され、生徒たちには、学年毎に教室が与えられるという並々ならぬ好意でした。日本人学校校舎の入り口には、幼稚園の先生たちの奉仕作業による手作りの「台中日本人学校」と大書した額が掲げられ、移転の日には幼稚園児全員が並んで拍手して迎えてくれたといいます。周りの人の温かい思いやりに、江原校長は心から感謝しておりました。授業の開始は10月11日で、約半年間この幼稚園にお世話になったのでした。

台中校の正門右側に李総統の自筆による「台中市日僑学校、李登輝」の表札があります。この表札のオリジナルは額に入れられ入口ホール右側に掲げられています。

再建校舎は2000年12月末に完成し、2002年９月20日震災３周年式典に李総統に来校頂きました。生徒たちに「台湾について」の話の中で李総統は「台中の地で、日本を理解し、台湾を理解し、世界の子供として学習に励んでほしいこと等や現在までの台湾の歴史をかみ砕いて話されたそうです。

（そして、2012年4月に「日本李登輝友の会」一行が台中にやって来た時にぼくは台中校を案内しました。その時に何と前日に届いたと言う李総統による校名のオリジナルの半紙を見せてもらいました。2010年暮れに台中市と県が合併したので、校名変更に伴い総統にお願いしていたのだそうです。総統の書かれた毛筆を見る機会などほとんどないので、一行は真新しい校名の書かれた半紙を前に誰もが記念写真を撮っていました。

台中校再建の裏にはこのように李総統、エンゼル幼稚園、また台湾や日本さらに世界中の多くの人々から支援してもらいました。夕陽で茜色に染まる白い校舎、その敷地、校舎のガラス一枚一枚、扉一枚一枚に至るまで多くの人たちの熱い思いが結集されていることを忘れてはいけないと思います。そして2018年3月現在、世界中に日本人学校が何校あると思いますか？答は86校あるそうです。でもその中で、その国の最高元首が書いた校門の表札は台中校だけなのです。

ガイドブックにない日月潭周辺の珍しいもの

2019/07/24

今日は旅行ガイドブックにも載ってない珍しいものを日月潭の周辺を訪ね歩いた。

（その１）魚池神社

魚池神社跡が町役場の裏手にあることを知り、９21地震後どうなっているかを見に行って来た。この神社は『台湾日本統治時代の歴史遺産を歩く』（片倉佳史著）によると1999年の震災で倒壊した未完成神社とのこと。神社につきものの階段を上りきった所に灯篭があり、一面はテニスコートになっており正面はお寺（瓊文書社）が建っていた。神社の狛犬は近くにある麒麟宮というところに移され正面左右に並んで置かれてあった。

（階段の上に神社があった）　（狛犬が移設されたお寺）

（その2）殉難の碑

日月潭は日本時代に水力発電工事をしたところ。日月潭ではサイクリングを楽しむ人も多い。でも風光明美な所に殉職した台湾人を祀る碑があるのを初めて知った。
集集線は鉄道で水力発電の資材を運ぶために敷かれた。
昭和6年10月に始まった工期は昭和9年11月に完成したが、工事期間中13名の台湾人が殉職、その人達の名前、出身地、年齢が刻まれていた。昭和9年に建てられた碑文は今から85年前のことであり判読不明だが、このように犠牲になった人がいて今日の日月潭があることを忘れてはならない。

（その３）おばあちゃんの洗濯場

日月潭の近くの頭社地区にきれいな金針花の花畑があるかもしてないというので車でこの地区に入ると道の交差点におばあちゃん、お爺ちゃんらの洗濯場があるという標識が、それも中国語、日本語、韓国語で書かれてあり、道しるべに従って進むと洗濯場があった。「昔、’昔、おばあちゃんは川に洗濯に行きました」と物語にでてくるような光景。洗濯機のない時代はこのような場所で女の人たちがきっと井戸端会議ならぬ洗濯場会議に花を咲かせながら洗濯してたんでしょうね。田舎の百年前の原風景を思い出させる所として、外国人観光客（中国人、日本人、韓国人）を呼び込むために道しるべを作ったのでしょうが、果たして効果の程は？

　残念ながら、花畑はどこにあるかわからなかった。まだ開花時期でなかったせいかもしれない。

富士山と玉山

富士山と玉山

１　富士山が玉山と友好山協定

2014年２月に台湾の最高峰・玉山（海抜3952メートル）と日本の最高峰で、世界遺産に登録された富士山（同3776メートル）をめぐる「友好山提携」協定が山梨県富士吉田市で双方の山岳団体代表により調印されたのです。

この協定では玉山と富士山について山岳関係者同士の交流、山の自然や文化のPRがうたわれており、調印した日本富士山協会の庄司清和副会長は文化・産業などの分野で交流を推進すると述べ、台湾側・中華民国山岳協会の何中達理事長は玉山の魅力を多くの日本人に知ってほしいのだそうです。

台湾には3700メートルを超える富士山クラスの山や峰が10ほどありますが、中でも3952メートルと ひときわ高くそびえる玉山は聖なる山として地元先住民のブヌン族には「パットンカン」、ツォウ族には「パグノ・ラカソ」（石英の山）と呼ばれ、海外では19世紀の米国商船船長の名にちなみ「モリソン山」と呼ばれていました。

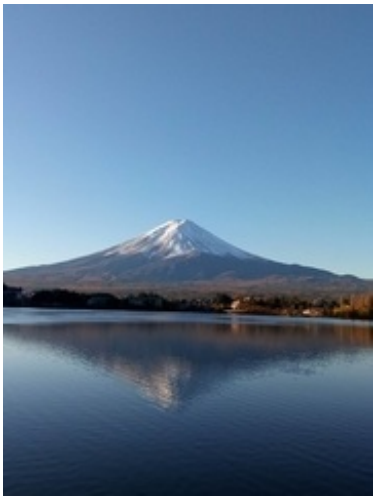
（
1895年日清戦争後に台湾が日本領となった際の測量でこの山が富士山より高いことが確認され、 1897年明治天皇によって「新高山（にいたかやま）」と改名。「日本一の山」とされ、1923年、台湾に滞在中の摂政・裕仁親王（のちの昭和天皇）より雪山は新高山の次に高い山の意味で次高山と命名されました。また1941年の日米開戦を告げる真珠湾攻撃せよの暗号電文「ニイタカヤマノボレ」はあまりにも有名です。終戦後は1947年12月、「玉山」と命名され今日に至っているのです。

２富士山に登る　　2019/09/05

日本に帰国するときに運よく機上から富士山を間近に見ることがあります。この時は「ああ日本に戻ってきたんだ」という感慨深いものがあります。今年から富士回遊号ができて新宿から乗り換えなしで直接河口湖まで行けるようになりました。それで８月下旬にこの新しい電車に乗って富士山に親子３人で登って来ました。8月31日に富士山五合目までバスに乗って行き、午後から吉田ルートを通って六時過ぎに九合目にある後来光山荘に泊りました。翌朝6時から山頂を目指してついに８時過ぎに日本一高い所に立ったのです。でも風がとても強くて山頂記念写真を撮らずに下山してしまいました。途中筋肉痛で歩くことが出来なくなり何度も休みながら6時間もかかってやっとの思いで五合目に戻って来ました。その晩泊ったホテルに温泉があったので筋肉痛を直すことができてよかったです。富士山のようにきれいなものには、近づかないで遠くから見ているのが一番かなとも思っていましたが、やっぱり富士山登頂は筋肉痛と言う予想外のことも生じたにせよ、人生で一番の思い出になることでしょう。

３逆さ富士　　2019/11/15

過日家内が台湾人の友達と一緒に訪れた河口湖で、運よく逆さ富士をみんなで撮影出来たと言って大喜びで帰って来ました。好天気で朝早かったので空気も澄んでいて大変良かったそうです。
逆さ富士は絵葉書や写真家の画集などで見たことがありますが、今回のように自分で撮れたのは初めてのこと。友達が撮ったものを含めて数枚ありましたが、その中から気に入った下記の写真をスマホのトップ画面にしたのがこれです。



今年9月1日に日本一高い富士山に初登頂し、来年は台湾で一番高い山で、戦前は新高山と呼ばれた玉山に登頂するつもりです。きれいなこの逆さ富士の写真を手に持って玉山の頂上に立つと言う夢が出来ました。

宝覚寺（台中）での元日本兵の慰霊祭

寶覚寺（台中）で元日本兵の慰霊祭　　(2019/11/25)

2001年以来毎年慰霊を目的に台湾を訪問を続けている日華（台）親善友好訪問団（団長の小菅亥三郎氏は本年7月に急逝）が今年も台中にやってきました。
寶覚寺は台湾の靖国神社ともいわれ、先の大東亜戦争で戦死された元日本兵軍人、軍属3万3000柱の慰霊祭を毎年この時期に台湾人とともに行っているのです。
式典は李登輝元総統筆「霊安故郷」の慰霊碑の前で日台双方の関係者が参列、故小菅団長の追悼式も挙行されました。
団長が生前寄稿してくれた前作『私と台湾』の中で～日本と台湾の永遠の友好を願って「日本の一角」に起つ～と記していました。お孫さんの茅野慧さんが参列していたのでその本をご霊前へと託して差し上げました。

台湾側の元日本兵も高齢化のために、今後は現地の人のサポートを'得ながら日華（台）親善友好訪問団が主催して今後とも慰霊祭を行っていくとのことでした。

この話を伺い台湾協会でもこの時期日本人慰霊祭を行っているので、できたら協力し合って（戦争で亡くなった元日本人と戦前中部台湾で亡くなった人たちの）合同慰霊祭を行ったらいいのではないかと思っています。
きっと1プラス１以上の相乗効果を生むのではないでしょうか。

（備考）小菅団長はＨＰで次のように述べていました。

団を組織して早10年、台湾へ足を運ぶたびに思うことは、
一つは、支那（中華人民共和国）は事ある毎に台湾は中国の領土の一部である、と声明しているが、わが国に来て恫喝外交をして金をせびる国と、わが国と一緒になって戦いながら何の見返りも求めず親日的に接してくれる国（台湾）が同じ国である筈がありません。

二つは、英米蘭に宣戦布告し、戦いに決起した事に何ら口を差しはさまない台湾。しかし、わが国・日本が「負けた事」をしきりに悔しがる台湾。そして、日本人が「台湾を放棄し、引き揚

げてしまった事」を寂しそうに語る台湾。統治時代50年間に構築した膨大なインフラを大切に活用し、わが国と共にアジアでも驚異的な経済発展と民主化をなし遂げた台湾。それが故に共産党による独裁国家支那・中国から一方的に領有宣言された台湾（『反国家分裂法』）。

三つは、お互いにたった一つしかない命を的（まと）に、大東亜の解放という大業に生死を賭け、世界史のうねりを大きく変えた若かりし日の実績を正しく認知し、その価値を共有することこそが誠の家族交流・兄弟交流の基盤を構築していくものと確信し、私たち訪問団は今年もわが国を代表し、この行事を実行していく所存です。

あとがき（道のうた：森川りう）

あとがき

この冊子を作るにあたって、ふとしたきっかけで「道のうた」という詩に出会って深い感銘を受けました。みなさんにも是非読んでいただきたく全文を紹介するとともに、あとがきに代えさせていただきます。

2019年（令和元年）師走

道のうた　　森川　りう

これから通る
今日の道　新しい道
通りなおしの出来ぬ道

苦しいことから逃げていると
楽しいことからも遠ざかる

感謝の心
みんなあるはず出せるはず
勝つ人は強いが
ゆずる人はさらに強い
人の世は　山坂多い旅の道

長所はうぬぼれると短所になる
短所は自覚すれば長所となる

やり手になるな
まかせられる人になれ

如何な云いわけも
自分の愚かさを隠すことが出来ない

出来ることはやろうとせず
出来ぬ事ばかり心配している

知りながら
つい忘れがち親の恩

幸福はどこにも見えず
誰にも知れず
だけどみんなのそばにある

過去が現在を作り
現在が未来を作る
苦しいとも苦しさの中に学ぶものを見よ
自分より他に自分を苦しめる者はない

むつかしい事は知らなくとも
人の悪口を言わないだけでとくになる

腹を立てまいとつとめて立てまい
腹を立てると寿命が縮む
人を困らせて得た物は
自分の身につかぬ
人の欠点にはよく気がつくが
善行や長所は見のがしやすい
身なりより光るあなたの心懸け

ああして
こうして
計画満点
実行せぬは玉に傷

ほめられて喜ぶ人は多いが
しかられて反省する人は少ない

与えても
減らぬ親切　残る徳
成り行きは偶然に来るものではない

いやな仕事も喜んでやれば
好きな仕事に変わってくる

人の世話はよく出来ても
人に恩をきせぬ事むつかしい

右でもない　左でもない所に
まことの道がある

仕事も人の心と身になって

金は重宝なもので神通力がある
ところが
金を我身の攻め道具にする人がある

豊かだから与えるのではない
与えるから豊かになる

笑顔でお早う
感謝でお休み
希望と感謝と反省の日を重ねつつ
我が生涯を意義深く

私と台湾２

http://p.booklog.jp/book/128252

著者 : 喜早天海
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kisousan/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/128252

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：デザインエッグ株式会社